

---

# 魔法少女リリカルなのは～Angel's singer

悠&ユウナ【Wユウ～】J N S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは／Angel-s singer

### 【NZコード】

N86500

### 【作者名】

悠&ユウナ【WYU~】JNS

### 【あらすじ】

人気絶頂のグループ『セラフィナイト』のリーダー月神悠夜……  
彼が紡ぐ歌は人々に感動と共感を与えて来た……

そんな彼には本人にも知らない能力があつた。

想いを歌に変える。

彼が世界にもたらすものとは一  
体何か

…

彼はただ唄い続ける。

## プロローグ（前書き）

初めましてーー！

この作品が処女作になります。

基本的に主人公が最強でハーレムになるかもしませんのをそういうのが嫌いな人はお勧めしません。

駄文で自分の自己満足で書くので出来たら感想は甘めでお願いします（笑）

## プロローグ

「はい、オッケーです！ チェック入りますー。」

スタジオ中に声が響く

『ふう……漸く休憩に入れるな……』

全く……俳優なんて俺の柄じゃないのにな……

「あつ！ 月神さん！ お疲れ様です！ 今日はこれで終わりだそうです！」

スタッフの一人が声をかけてきた。

『分かりました。では明日までの録音があるんでこれで失礼します』

「そりなんですか。お疲れ様です！…………あの娘がファンなんです。サインを頃いても宜しいですか？」

『構いませんよ。如何は何て言つんですか？』

「あつがどういりますー智代って言いますー」

『智代さんですね？…………これで構いませんか？』

「はーー！ ありがとうございますー！ これで娘に喜んで貰えるーー！」

『やう言つて貰えると俺も嬉しいです。娘さんに宜しくと伝えて下さい。では失礼します』

「はーー！ 引き止めてしまつてしませんでした。お疲れ様でしたーー！』

俺はスタッフや共演者に挨拶を済ませ樂屋に向かった

『全く……マネージャーは俺が音楽だけで行きたいのは知つてドラマのオファー受けんなよ……』

俺は私服に着替ながら自分のマネージャーに対して愚痴る。

ここで軽く自己紹介しておこう。俺の名前は月神悠久、今年で23歳になる。バンド『セラフィナイト』のボーカルとギターを担当する一応、リーダーだ。17歳の時にデビューして今年で5年……辛い事や悲しい事も沢山あつたが今や俺達はトップに立つた。だが……

『ふう……最近は違う仕事が増えたな……』

先程も収録したばかりのドラマに始まり、バラエティーにニュース番組、アニメの声優、来年の春には映画の主演も決まっている。

『人気があるのは有難いんだが、俺達の本業は歌手なんだ……』

他のメンバーもそれぞれ色々な番組に出演し人気を得て中々、新しい曲作りに入れないのでようやく新曲のレコーディング迄にこじきつけた。

『明日は久し振りの新曲だ。気分を変えて行くか……』

俺は着替え終わると駐車場に向かい愛車に乗り込む。

『ん？ あれは……』

ふと駐車場の隅に女人がしゃがみ込んでいた。

俺は心配になり急いで車から降りて女性の所へ向かった。

『あの……どうかしましたか？ 何處か具合でも悪いんですか？』

と声を掛けた。

すると女性は顔を上げた

『あれ……？ もしかして田畠さんですか？』

そう……その女性は以前、アニメの声優をした時に共演した事がある。

その時にはもう一人の共演者の水城さんと一緒に打ち上げしたり、お互いのライブを観に行ったりと仲は良い。

「悠夜くん……」

『田畠さんー? 大丈夫ですかー? 顔色が悪いですよー…』

田畠さんの顔色は青ざめでいて憔悴しきつた顔をしている。

『田畠さん……取り敢えず車に乗って下さい。病院に行きましょう』  
……

俺は田畠さんを抱き起しすと車に向かった。

「悠夜くん……ごめんね……」

『何を言つてるんですか……大丈夫ですから……』

「本当にごめんね?」

『だから気にしないで下さこよ。俺は気にしてない』  
「ぐつー?』

突然、腹部に痛みが走り俺は苦痛の声が滲み出た……

『くつ……！？ 何が！？』

俺は自分の腹を見ると刃渡り30センチは越えるナイフが深々と刺さっていた……

『田……畠……さん? 何で…?』

俺は何とか自分の腹からナイフを抜き取るとそのまま投げ捨てた。  
アスファルトにカラーンと音が鳴り響く……

『くつ……』

腹からは血が流れ地面にはまるで川の様にどんどん流れ落ちている。

『田畠さん……取り敢えず病院に向かいましょ!……俺、少し頭がくじくらしてきました……』

「悠夜くんは本当に優しいね……私に刺されたのに何も言わないし  
や……」

『田富さんが訳もなく人を刺すなんて有り得ないです……』

「本当に優しいね……残酷なくらい……」

『何が…………ですか？』

「悠夜くんはわ……誰にでも優しいの……それでいて自分のスタイルは確りしていて崩さない……完璧なんだよ…………だから翔子ちゃんも悠夜くんに惹かれるんだよー?」

『水城さん……が?　だぐどそれで何故、自分が田富さんご刺されるんですか…………?』

「分からぬい?　ううん……悠夜くんが分からぬい筈は無いよね?　私の気持ちが…………」

『…………』

確かに俺は気付いていた……田富さんも水城さんも俺の事を……  
だけど俺はそれに気付いていない振りをしていた……何故なら新しい関係になる事で今の関係を壊したくなかったし、俺にはどちらかを選ぶ事が出来なかつた……

「それで、昨日、翔子ちゃんから電話が来て明日、悠夜くんに気持ちを伝えるって言われた……だけど……悠夜くんは私の物。これで悠夜くんは誰の物にもならない……ずっと私の事だけを見てくれる！最初からこうしていれば良かったんだ これで私達はずっと一緒にいたよ」

狂った様に告白する田富さんを見つめながら俺の意識がだんだんと遠くなつて行き体が崩れ落ちる。

死ぬのか…………だけどこのまま死ぬ訳にはいかない  
伝えないと……俺の想いを……

『田富さん……』めんね……俺がはつきりとしなかつたから……俺はひかりの事も翔子さんの事も好きなのに選べなかつたから……』

「えつー？」

田富さんの顔から狂氣の色が消え、戸惑つた様な顔になる

『俺は最低で……自分の気持ちにも蓋をして2人に嘘をついてた……でも……今なら言える……俺はひかりも翔子も愛している……』

「悠夜くん！？ 『めんね！？ 私……何て事を……』

ひかりの眼から涙が溢れて俺の顔にぽたぽたと落とす

『泣かないでひかり……俺は大丈夫だから……』

「待つて！　今すぐ救急車を呼ぶから……」

『ひかり待つて……俺の上着のポケットにCDがあるから取ってくれ……体が自由に動かないんだ……』

「CD！？　今はそんな事よりも　『頼む……』分かつたよ……これだね？」

『この曲は……新曲のデモテープ……俺が……自分の気持ちを込めてひかりと翔子に贈るつもりで作ったひかり達の為に作った曲だ……後で聴いてくれ……』

「分かつた！？　分かつたからもう喋らないで！？」

『良かつた……ずっと伝えたかったんだ……やつと……本当に書きたい曲が書けた……』

「悠夜くん！？　確りして！？悠夜くん！？」

『最後に……もう一度だけ歌いたかったかな……』『君は俺が求めていた全て……俺の空っぽな魂が感じたかったもの～君は俺が待ち望んでいた者……夢の中で探していた者……君は俺の魂…俺という存在全てに光を射してくれた

もう君以外の人には目も心も向けない……

君は俺の運命の人

運命はそれを知っていたんだ……

そして、今日、君を俺の前に連れて来てくれる 『…………受け

取ってくれ……俺の歌を……』

「悠夜くん！？ 目を覚まして……悠夜くん！？…………いやあああ～～～！？」

## プロローグ（後書き）

主人公……まだ転生していないし……

因みにここで登場した人はネタです（笑）

モデルは居るのですが、バレバレかな……

## プロローグ2（前書き）

何かすでにグダグダですね……

ご容赦下さい……

## プロローグ2

『ん？ ここは？』

そこは白い空間が広がっていた

確か俺は……

ひかりに刺されて……

『死んだのか……？』

「そうよ」

『つーー？』

突然の声に咄嗟に身構える。

「やあ～ねえ～ ピックリしたのは分かるけど身構える事は無いじ  
やない……」

振り向くとそこには女性が微笑んでいた。

だがその女性の背中にはまるで神話に登場する天使のような翼がつ  
いていてその存在感は人には有り得ないほど神々しい。

『すいません。突然だつたので驚きまして……所で貴女は？』

「神でも天使でも好きにこんで良いよ 私は悠夜って呼ぶから  
『はあ……では神様、俺は死んだんですよね?』

「様とか要らないのに……うん、悠夜は死んだよ? 下界ではファンの娘達とかで大騒ぎになってるよ?」

やつぱり死んだんだ……

それは良い……それよりも今は……

『ひかりは……ひかりはどうなりましたか?』

「ずっと見てたけど本当に残酷なくらい優しいわね……まあ良いわ。  
彼女ならちゃんと血主として罪を償っているわ

良かつた血殺とかされてなくて……  
ひかりには幸せになつて欲しい……

『あの……所で俺はこの後はどうなるんですか?』

「やつと来たわね 貴方にまつれから違う世界に転生して貰つわ

『?』

「リリはキタ～！～とか、テンプレ～～とか無いの！？」

『えっと……テンプレって何ですか？』

「知らないのね……ここに来る人は大抵知ってるのに……」

『すいません……？ 所で他の人って言つてましたけど他の人も来  
るんですか？』

「最近は多くてね～ 神のミスで死なしたりとか増えたのよ～

『もしかして……自分も……ですか？』

「違つわよ～ 貴方のはどうしようもない事実よ～

『そうですか……良かつた……では何故？』

「私が貴方のファンだからに決まってるじゃない！～」

『…………は？』

「もう少しあから我慢してたナビもいつ限界握手して～ サイ  
ン頂戴」

『はあ…………応援ありがとうござります…………これで良いで  
すか？』

「ありがとう～～～ これで他の女神達に血盟出来るわ～

なんだか神様がそこら辺にいる女子高生に見える…………てかこいつで  
も知られていたんだ……

「じゃあ～何処の世界に行く？ サービスで能力もオマケしちゃつ  
わよ～？」

『えっと…………世界に能力つて何ですか？』

「世界つて言つたら漫画の世界にチートな能力に決まつてるじゃな

い  
「

『すいません……漫画とかあんまり読まなくて……アニメも余り……』

「えつー？ 全く知らないのー？ 貴方、声優もやつてたじやないー？」

『えーと……けいおん！ならバンブの話しだし読んだ事がありますけど……』

「ゲームはー？」

『FFTとかドラクエとかなり……』

「じゃあネギまとか、FATEとか、リリカルなのははー？」

『なのはならゲームで声優やつましたけど詳しく述べです』

「ならなのはの世界にしましょー！ 能力は私が見繕つてあげるわー！ 容姿とか基本スペックは元々弄らなくともチート地味てるしー」

『良くなは分からんんですけど、褒めてます？ それ？ 確か  
なのはの世界つて魔法とか戦闘が有りましたよね？』

「大丈夫！！ 魔力は最高にしてデバイスも用意するから  
えーと何も知らないからサポート出来るユニゾンデバイスにて守護  
する人も居るでしょう。 それからネギまの別荘と王の財宝は……  
彼が知らないから空間だけ…… それと悠夜には歌つていて欲しいか  
ら詩魔法を使える様に……」

『何だか不安だな……』

「それからそれから道具を作つたりする知識に……

「出来たわ！！」

『終わりましたか？ でも自分はそこで何をすれば良いんですか？  
それに能力とかも分からないし……』

「大丈夫！！ ちゃんとサポートする人も居るし、悠夜は好きにや  
つて頂戴！」

『分かりました。取り敢えず頑張つてみます』

「じゃあ行つてらっしゃい！」

『行つて来ます』

そういうと自分の体に光りが射して意識が消えていった

## プロローグ2（後書き）

とこう訳で本編になります  
実は私は余り原作とか詳しくないんですよ……  
ですのでアドバイスとか貰えると嬉しいです。  
駄文ですが宜しくお願いします。

## 第1話（前書き）

ところが、この訳でなのはの世界にやって来ました。まだ原作キャラは登場しない……

## 第1話

『「ここが違う世界か……』

と辺りを見回してみたがそこは自分がいた所と余り変わらない普通の公園だった

『確かに広くて海が見えて居心地は良さそうだけど、普通だな……』

てっきり近未来的な都市とか魔法学校を創造していた俺は余りの普通さに驚いていた

「マスター今時それはないですよ～～」

『何奴！？』

咄嗟に俺は時代劇でのやられ悪代官風で応えてしまった……

「ムムム～！… お前に名乗る名は無事です～！？」

何故か謎の声の少女？は乗つてくれた（笑）

「つてマスターがそんなにノリが良いとは思こませんでしたよ～」

『「めん……体が勝手に反応しちゃって……』

と振り向いた先には誰も居ない

『あれ？ おかしいな……確かに声が聞こえたのに……』

言われて上を向いて見るとそこには30センチ位の可愛い少女が浮

いていた……

『…………えっと、『テーモン』?』

そう言いつとたの可愛い『テーモン』は両手をぐるぐる回しながら

「違いますよ～！？ 何処をどう見たら可愛い私が『テーモン』に見え  
るですか～！？」

『「めん……ビックリしてつー……』

少女が必死の表情で顔の前で暴れるのですぐに謝った。

「仕方ないですねえ～今日は特別に許してあげますよ～」

『「ありがとうございます。それで、君は誰？ それとこの場所が何処だか  
分かる？』』

『私はですね～フヨリツて言います マスターのパートナーでコ  
ーナンデバイスです！ それから此処は海鳴市の公園ですね～』

『海鳴…………？ ユニゾンバイス？』

海鳴市なんて聞いた事ないしユービンテバイスって言われても意味が分からぬ

『なあ、フエリ……もひちよつと詳しく教えてくれないか？ せつぱり分からぬいよ……』

『さつ言うとフエリは少し考え始め俺の顔をジロジロと見てきた……』

「マスター それは構わないんですけど、こんな時間に子供が一人で公園に居たら補導されちゃいますよ～？」

『何を言つてゐんだこいつは？ 僕がどうしたら子供に……』

『さう言えば…… やけに視線が低い様な……』

そこで俺は近くにあつた公衆トイレに急いで駆け込んだ。

『……………どうなってるんだ……これば……』

鏡で自分の体を見てみると確かにそこには俺が居た……………小さこ子供の体で……

『見たといひうるべん歳位か? やも句ぐ……………』

俺が呆然としていると突然頭に声が響いて来た。

『やつまへビツ? ビックリした?』

『IJの声は……神様?』

『そーでーす 今、悠夜の頭に直接に声を届けてるんだよ 涙  
いぢょー』

……………一瞬イラッとしたがIJは耐えておいた

『あの……俺の体が子供になつてゐるんですけど……』

『そりゃあ～そりゃあたしが小さくしたんだじい～』

『だつてさ～前の年齢だとわ…介入したり口ココンだよ～』

『…………訳を教えて貰つても構いませんか…………？』

『だから～良い歳の大人が小学生と一緒に居たら犯罪だよ～？』

『あの……小学生以前に、幼児なんですが……？』

『……ミスつちやつた めんづ～～』

『俺……切れても良いよね？！』までも必死に堪えて来た筈だ……

『ふざけるな！？ 第一、俺は原作も知らないし、これからビリすれば良い！？』

『もしかして……怒つてる？』

『当たり前だ！？ せめて説明位わやんとしきーー。』

『分かつたから怒りないでよ～ 説明するからね～』

『分かつた……じゃあフヨリの所に戻ろ。 フヨリの事も説明してくれよ？』

『アイアイサー～』

『分かつた？』

『…………本当に小学生か？』

『本当よ～』

しかし……アニメの話しだと思っていたが随分とハードな世界だな  
……大人は腐つてるとしか言えない……

『もしもし～？考え込むのは後にしてさ家に帰つたら～ちゃんとあ

たしが用意したのよー！　あたしがねーー！』

『あつ、ああ……ありがとう。場所は？』

『フヨリにちやんといインプラットしてあるから大丈夫　じゃあそろそろあたしは失敬するわ～　因みにあたしが連絡をするのはこれまで最後だからね？　じゃあばいびー』

嵐の様な神だ……

『フヨリ行こうか？　案内を任しても良いかな？』

「任せたぞー・マスター」ちぢですー

フヨリと家に向かいながら周りの景色を見る……

数年後にはこの町でジュエルシードを巡る戦いや闇の書事件が起きるとはとても考えられない程穏やかな町だと思つ。  
しかも小学3年生の少女が……

自分にどれだけの力があるとかは分からぬが幼い少年や少女が傷つき大人が何も出来ないのは間違つてゐる。自分の出来る限りの事をしようと心に誓い新しい我が家を目指した。

## 第1話（後書き）

相変わらずグダグダですね……

次回は新しい家と悠夜の能力の説明になると思います。  
出来たらプロフィールまで行けると良いのですが……。

## 第2話（前書き）

先ずは悠夜の会話なんですが、『』から他のキャラと同じ様な「」に  
変更しました。

『』はデバイスの方にしようと思つたので……

では2話直しくお願ひします。

## 第2話

「着きましたよ　ここが私達のお家です　」

「…………隨分とデカイ家だな…………2人ならこんな屋敷は必要ないん  
じゃないかな……」

そう……それは家と云つより豪邸、屋敷の方が近い。

向かいにある月村さんって方の屋敷も大きいがそれよりも大きい……

「そんな事は無いですよ～それに私達だけじゃ有りませんよ?  
守護騎士さん達も居ますし、広い方が修業とか魔法を扱うにはピッ  
タリなんですよ～？」

守護騎士か……確かに夜天の書にもヴォルケンリッターという騎士が  
居たな……　そうなると俺にもそういう書があるのか?

「なあフェリ?　俺にも夜天の書みたいなデバイスがあるのか?」

「書とは違いますけどありますよ」 私はその管制人格ですから

」

「何処に有るんだ? 何処にも見当たらないけど……」

するとフェリは俺の体を見ながら……

「マスターの身体の中に決まつてゐますよ」

俺の身体に!?

「なあ……フェリ? それって出せるのか?」

「それは無理ですね~もしうせたとしても世界が滅びますよ?」

あの女神は……人の身体を何だと思つてゐるんだ!?

「一体、何が入ってるんだ？ もしかしてロストロギアって奴か…？」

「ロストロギアっていうのは間違いではありませんね。正確にはアルトネリコって叫び塔ですね～」

「塔…？ 何でそんなものが身体に…？」

「待つて下さいよ～ちゃんと順番に説明しますから～マスターは先ずですね？ 普通の人間とは違います。レー・ヴァ・テイル・オリジンの改良番みたいな感じですねー」

「レー・ヴァ・テイル・オリジン？ それって何だ？」

「えーとですねー謳う事によって様々な力を発揮出来るです～自分の強い想いを謳う事によつて詩魔法を紡ぐ事が出来る人をレー・ヴァ・テイルって云うんですけど、マスターは更に特別で塔の管理者として普通より強力な力を持ち、塔が崩れない限りは死なないし、18歳で成長が止まります～」

「死なないって……反則だな……それで塔は？」

「詩魔法のサーバーだと思って下さい。そこには全ての詩魔法が詰まっています……」この世界では余り関係ないですから~」

「急に説明が簡単になつたな……じゃあどうやって詩を紡ぐんだ？」

「本来であればパートナーの人に精神世界に潜つて貢うんですが、マスターはオリジン、それも改良型なので必要ありませんね~ 私とユニゾンしてくれれば私がマスターの詩を紡げますし、馴れてくれば一人でも紡げますよ~」

「成る程……他の能力はどうなつているんだ?」

「そうですね~ 先ずは魔力ですが塔の力もあるので測定は出来ないですねえ。

普段はワミッターを付けてるのでSS+って所ですかね~ 他に

「王の財宝（空間だけ）とかアイテムとか沢山有りますね～

「王の財宝（空間だけ）って何？ それにアイテムつて？」

「簡単に言えば四次元ポケットです アイテムは主にFFヒーロー  
クエのですね～ マスターなら自分で作れると思いますがし～」

自分で作るつて…  
簡単に出来る物か？

「それで以上か？」

「まだあるんですけど……他は今のが完璧にしてからこじましょ～

」

「分かった。それとフェリ？ 僕の事はマスターつて呼ばなくとも  
良いよ？これからは家族だしね」

「分かりました~ ではやつやつて呼びますね~」

「何か恥ずかしいけど……これから宜しくなファイア~」

「はー~ 宜しくお願ひします~ 悠夜~」

そうなると次にやる事は…

「わ~……色々とこなげやいかな事が沢山、有るナビ先づせ…

…

「お~すけー~?」

「こんな時間だし……夕飯にしてよ。死んでからやる事ない飯食べないし……」

「守護騎士達はどうしますか~?」

「里口であります。流石に今日は無理だよ……」

「そうですか～じゃあ、お買い物に行きましょう～お腹ペコペコです～」

「了解！　つて時間は……7時半か……この姿だと厳しいかな……」

「大丈夫です！　私が居ますから」

「フェリが……？」

フェリをじろじろと見てみたがどう見ても妖精だ……俺よりもヤバイと思つが……

「何ですか～？　その眼は～？　私を信用して下さい～」

「だつて……ねえ……？」

「良いですーー！見てて下わーーー！」

セーフティーハーツの身体が光りに包まれた。

そして現れたのは……

「どうですかーー？こんなに大きくなれるんですよーー？」

確かに大きくなつた。  
なつたが……

「それでも小さいね……」

最初よりは確かにましだとは思つが、これでも小学生の低学年レベルだ。

「もおー良いから行くですよー。悠ちゃん」

悠夜「悠ちゃん……分かったよ……行こうか？」

心に少しダメージがいつたがそれよりお腹が減った……

今は『ご飯が最優先だ！』

フェリに海鳴市のマップがインプリントされていたので俺達は迷わず  
にスーパー丸きゅーにたどり着いた。

「フェリ。何か食べたい物はある?」

だけどフェリ

からの返事は無かった……

何処に行つたんだ?

俺は取り敢えずフェリを探す事にした。

今日は良い日や

何時もなら直ぐに無くなる特売品の卵が今日は買えた！

両親を早くに亡くした私からすれば出来るだけ節約せんとな。

私の名前は八神はやで、何だか考へてる事が5歳らしくは無いけど、足が生まれ付き悪くて学校も行けない身としては何時何があつても良いようにお金は大切にせんとな

えつと後は……

と考えながら進んでいたら（ガツン！）と音がして車輪が動かなくなってしまった。

「あかん……車輪に何か挟まつてもうたか？」

挟まつてる物を取ろうにも周りの人は私の事など気にせずに通り抜け

誰かに取つて貰おうにも周りの人は私の事など気にせずに通り抜けて行く。

「前言撤回や……今日はついてへんわ……」

仕方ないわ。

こつなつたら自分で何とかするしかあらへんな……

私は無理やり立ち上がりつとしが、

やはり上手く動ける訳がなく……

「（あかん！ 倒れる！…）」

と皿をつぶつて衝撃に備えた。（ボフッ…）……………が何時まで  
経っても衝撃は無い。

その代わりに花の様な良い香りが全身を包みこんでいる。

「（何… 良… なぜ… まるでお母さん抱き締められてるみ  
た…や…）」

私は余りの心地良さにすっかり自分が倒れそうになっていた事を忘  
れてしまつた。

「あの、大丈夫？」

その声に私は慌てて離れてお礼を言った。

「あっ、あのすこませんーー！」助けてくれてありがとウソだこまゆ

私は相手の顔を見る余裕もなく勢いよく頭を下げる。

「気にしないで、俺……いや僕なら大丈夫だから頭を上げてよ」

その声に私は安心して頭を上げた。

其處には

L

其処には流れる様な美しい銀髪を背中までに伸ばした私で同い年位の男の子が立っていた。

フェリを探し廻っているが未だに見付からない……

「本来に何処に行つたんだ？　あいつは……」

改めて店内を見回して見たら急にガツン！…といつ音が響いた。

俺は何だろうと思つて音がした方を見回して見ると、車椅子の女の子が不安そうな顔をしながらキヨロキヨロと見回している。

「トラブルか？　しかし周りの大人は全く気にしてない……」

随分と薄情なもんだなと思いながら少女の所に向かった。

すると、少女が諦めた様な表情を浮かべると起き上がりつとし始め

た。

「（危ないな……）」

そう思いながら恭へ速度を早歩き、駆け足と上げていった。

すると案の定、女の子がフラフラし始め倒れそうになる。

「（くわーーー 間に合ハズーーー）」

（ボフツーーー）

俺は全力で駆けると倒れそうになつてた女の子を抱き締める形で支えた。

「（危なかつた……もう少し遅かつたらこの子は床に転んでいたな  
…………）」

それにしても彼女は随分と軽いな  
そんなに年も違わないだろうし……

ん？ 彼女……動かないけど大丈夫か？  
俺は心配になり声を掛けた。

「あの大丈夫？」

そう言つと女の子は慌てて俺から離れると勢いよく頭を下げる。

「あっ、あのすいません！！ 助けてくれてありがとうございます！」

「気にしないで、俺……いや僕なら大丈夫だから頭を上げてよ」

小さいのに随分と礼儀正しい娘だな……  
そう思いながら、俺だと不自然かな？ と思い僕と言い直しながら応えた。

すむと女の子は安心したのか上げていた頭を上げた。

ん? 何か人の顔をじろじろと見て考え込んでる。  
髪の色が珍しいのかな……

「えっと、ビルもぶつけたりはしてないかな? それと咄嗟に抱き締められちゃつていいもんね?」

「そんな事あらへん! ? お蔭で転ばずにはすんだし、怪我もせんへつたで! ! !」

女の子はちいさながら頭と手をワンパンと振りながら応えてくれた。

しかし、そんなに慌てなくとも良いの? ……  
皿を回すよ……?

「なら良かつたよ。 所で頭は大丈夫? ……?」

何か目をぐるぐる回してると大丈夫かな……？

「大丈夫やー！ 」これでもハ神さんとこのお嬢ちゃんはしつかりしてゐて近所のおばちゃん達には有名やーー！」

愉快な娘だな。

そんな事は訊いてないのに……って質問の仕方が悪かったかな？

「元気そつで良かつたよ。ちょっと車輪を見せて貰つよ？」

やうにいと俺はその場にしゃがみ込んで車輪を覗いて見た。

良く見て見ると車輪に何かが挟まっている、何かと思つて引っこ抜くところには……

「これは……確かに、ノア様人形……？」

それは俺が居た世界で大人気のクロス君の災難つてアニメに出て来る大人気のマスコットキャラだ。

以前に声優で仕事した事があるから良く覚えている。

すると今まで混乱（？）していた女の子も我に返ったのか俺の手の中のノア様人形をじーと見ている。

「これ……知ってる？」

俺は尋ねて見るが

「ん~知らんないなー……けどメッシュ可愛いなあ~」

知らないのか  
じゃあこれは一体。

『「ゴメーン！ それあたしが落としたやつへ』

「…………頭が痛くなつて來た…………」

「（また貴女か！？…………いい加減、あんたつて呼ぶぞ！）んなへじょ  
うーー？）」

『あんたつて呼び捨て！？夫婦みたいねえ～』

駄目だこいつ…………

「（こいつかもう出て来なこつと書つてたじやないか）」

『おねーさんは気紛れが大好きなの（・・・・・）キリッ』

「（もう知らん…………それでこわはビリするへー）」

だんだん頭痛が酷くなつて來た……  
早く終わらせよ。……

『悠夜にあげるわ　さてそろそろ麻雀に行くからジャネ～』

「（）（）（）……ムカつく……」

と俺が何時までも黙つていると女の子が話し掛けってきた。

「お兄さん、急に黙つてどうしたん？」

「あつとじめんね？　ちょっと考え方をしてた……それよりこの人形あげるよ」

俺は人形を差し出した。

「いいんか？ でも誰かの落とし物と違うん？」

そう言いながらも興味があるのかチラチラと人形を見ている。

「あ～、うん。 それ自分の姉さんのなんだ…… 前に無くしたって言つてたやつだよ…… それ」

「でも探してるん違うか？ 私が貰つたら悪いで……」

確りした娘だな。

どつかの馬鹿も見習つて欲しい位だ……

「うん。 新しい奴を買って貰つてたし、姉さんが持つより君が貰つてくれた方が人形も喜ぶよ！」

そう言つと俺は人形を女の子に手渡した。

「そっかー ジャあ貰つとくわ 名前とかあるん?」

「確か……ノア様って名前だつたよ!」

「ノア様かー何か偉そうだけど良い名前や じゃあこれから宣しくな? ノア様」

「そつまうと人形をぎゅうつと抱き締めた。

「さてと……それじゃあ僕はそろそろ行くね?」

いい加減にフイアを見付けて帰らないと……  
先程からお腹が食料を寄越せと抗議している。

「そんなん……もう行っちゃうん? もっとお話ししたいわ~」

「そう言つと俺を上田遣いで見つめてくる。

「僕もそうしたいんだけどね……姉さんが待つてるしね」

「そう言つと残念そうな顔を浮かべて……

「それならしゃあないかあー 本当に残念や……あつそう言えればお兄さんの名前を教えてくれへん？ 私はハ神はやてつていうんやー！」

その名前を聞いて俺は驚愕した。

ハ神はやてと言えば闇の書事件の最大の被害者であり、その後も大変、重要な位置に居る主要メンバーの一人だからだ。

「（確かに車椅子だし関西弁だ……情報だけで知つてはいるが、それだけだ。後でフィアに訊いてみよう）」

黙っている俺を不思議に思ったのか

「お兄さん……？」

と尋ねてくる。

「あつ……何でもないよ。可愛い名前だなって思つてたんだ。」  
の名前は月神悠夜つて言つんだ」「僕

「かっこいい？」  
「ありがとう 悠夜君って言うんやね。  
てっきり外国人かと思つたわ」

八神さんは顔を真っ赤にしながらそう言つて来た。

……なんで真っ赤になる？

「八神さんって良い名前だよ  
それと僕は一応ハーフだからね…」

「…

これは本当だ。

母親が外国の出身で髪の色は母親譲りだ。  
小さい頃はそれで良く構われたっけ…

「へえ～もうなんや？ それと私はハ神じゃなくてはやてって呼んでくれへん？私は悠夜君って呼ぶからー」

「オッケー！ はやてー！ こんな感じで良い？」

そう言つとやはやは満面の笑顔を浮かべて…

「ばつちつば  
やこひや

と言つて親指をグッと立ててくる。

それを見て俺も微笑みながら親指を立てる。

「じゃあ、今日から友達や  
宜しくな悠夜君」

「ああ。宜しけねやうへ

そうしてはやてと和みながら話していくと……

「アーニー タンクー - 」

と俺を呼ぶ声が聞こえる。

つてかその声は……

俺は声のした方を振り向くと

と泣きながらフェリが突っ込んで来る。

「やつやあ～！　あのね？あのね？　美味しいそつなお菓子があつてね？　やつやと一緒に食べたいなあ～て思つていたらいつの間にか知らない場所に居てね？何だか急に淋しくなつてえ～」

トフヒリは一気に捲し立てて来た。

いや……それってあ～

「あ～良じ良し……僕は「」に面するからもつ泣かないで？」

俺はハンカチを手渡しながら泣き止み。

「へへへへへ

ますます激しく泣き出した……  
暫くそつとしてお」

「あの……悠夜君？」

話し掛けられた方を向くとはやでが戸惑った表情を浮かべながら

「那人がお姉さん……？」

と訊いて来た。

俺はじっとフヨリを見つめる。

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへ」

はやての方に顔を向けると

「…………一応……俺の姉だ……」

力無い俺の声がスーパーに響いた……

## 第2話（後書き）

え～とこの話で悠夜の詩魔法とかの説明がありますが、元ネタはアルトネリコ？ってゲームからです。

あれの自分なりに改良した感じです。

一言で言つながら攻撃が出来るバサラって感じです。

設定やプロフィールは近い内に出す予定ですので…

ではまた次回です

### 第3話（前書き）

え～と……

まあはすこませんーー！

少し作者が暴走しました（笑）

### 第3話

その後、漸く落ち着いたフェリと買い物を済ませて向かったのは

「……が私の家や さあ悠夜君もフェリさんも入って入って」

「……がはやってちやんのお家ですかあ 良い所ですねえ~」

「…………まあ~」

何故、俺達がはやっての家に訪れているかは簡単だ……

あの後、泣き止んだフェリのお腹が鳴ったんだ……

それを聞いたはやってが夕飯を「」馳走したいと言いだし、フェリが

それを喜んで受けた形だ……

最初、遠慮した俺だけど…はやでが久し振りに楽しいご飯が食べれると本当に嬉しそうな顔で話すのを聞いて何も言えなくなつた。

因みに、はやての両親が亡くなつてからははやてから聞いていている。

そんな事を、会つたばかりの俺達に話して良いのかと尋ねたら、  
悠夜君とフェリさんは友達やから  
の一言で済ました。

はやての家に向かう最に俺達の事も話した。

勿論、転生した事や魔法の事は話さなかつたが、俺達が姉弟で2人で暮らしている事と、近々、親戚が一緒に暮らす事は話した。

親戚つてのは勿論、守護騎士達だ。

フエリともだいぶ打ち解けたようで、すっかり仲良くなっている。

「悠夜、入らないですかあー早く入りましょう~」

「ああ……」「めん。じゃあ入るうか?」

はやての家に入ると先ず目に入ったのが……

「タイースのマスコット?」

玄関に置いてあったのが某野球チームのマスコットだ。

はやは阪 ファンなのか……  
ていうか此処にもあるんだ 神。

予断だが俺はジャ アンツファンだ。生前に始球式に出たのがきっかけだ。

「ん？ 悠夜君、そんなにそれ見てどうしたん？ もしかして阪  
ファンか！？」

「……………」

「……………」

「何ですかあ？ 巨人に阪神つて～」

「フヨリの馬鹿！？」

せっかく伏せ字にしてたのに…！」

「そつか～ 悠夜君は読 の手先か……」

何だろ？…

はやての背中に虎のオーラが…

「はっ、はやて！ 僕は基本的に嫌いな球団は無いんだ！！ それに好きとは言つてもそれ程、詳しくは無いー？」

「ふーん……そつなんか……だつたらこれを着てみいー？」

「ふうーんではやでが取り出したのは虎のハッピだった……

「これを見るのはか？」

「俺こま……俺こま……！」

「僕こまとも出来ない……」

「あー!? あー!? あまり無理をしたかー！ 私の事が好きならこれを着いやー？」

「せめてー？ 何か無茶苦茶だよー？ 落ち着いてーー！」

「これが落ち着いていられるかい！？ 私の夢は好きな人と2人で  
甲子園に行く事なんや！？」

はやてが壊れた……

俺はフェリに助けを求めるようと視線を向けたが。

「（＊＝＝）ボー」

あいつは！？

見るからにほほんとした顔をして！？

仕方ない。

何とか落ち着かせねば……

「はやて……」

「何や！？」

俺は手を開いて見せて何も持っていないのを確認させると、手をグツと握った。

そして開いた手の中には小さなお花があった。

「あげるよ」

そう言つて手渡すとはやては最初はポカンとした表情だったが次第に笑顔に変わり。

「ありがとうー。悠夜君って手品が出来るんや！ それにしても綺麗な花やなあー 私、お花のプレゼントなんて初めてやー」

ほつ……どうやら誤魔化せたみたいだ。

はやてに野球の話題はしない様にしよう……

そう考へてみると今度はフヨリがむくれ始めた。

「もう、悠夜！？ はやでちやんばかりズルイよー！？ 私もお花が欲しいよー！？」

今度はフェリか……

仕方なく俺はフェリに向じ様にお花を出してあげた。

「わーい 悠夜からお花貰いましたあー」

その姿は變らじへじへ俺よつ年上の（設定）には無理がないか？

「フェリさんも奥かつたなあ」

「はいです せめてちゃんとありがとうございましたー」

まるひで姉妹だなどちらが姉に見えるかは口にはしないが……

「わて、じやあ晩御飯作るから待つといでなー。」

はせてはやひさしだり上がった。

流石にただ待つのもアレだな……よし……手伝つか。

「なあ、はやて。僕にも手伝わせ貰えないかな?」

「あれ? 悠夜君、料理出来るんか?」

皿麺ではないが料理は転生前から好きで、休みの日に仲間になじよく振る舞つてた程だ。

「ああ、料理が趣味でね家でも僕が作る予定だよ

「そりなん? そり楽しみやー。だったら別々に作りへん?」

「良こよ。じゅあ何を作りつかなー 姉さんまだいりあるね。」

「私も作りますよー? 悠夜ー 楽しみにして下さいねー

「どうやらフローリも作る様だ、ていうか料理作れるんだ……

そんな事を考えながら俺ははやてに続いてキッチンに入つていった。

→ SIDE OUT →

←はやてSIDE←

悠夜君が料理を作れる何て意外やな……

だけど、私だって料理は得意やー 男の子には負けへん!!

でもお互いに料理が作れるのはポイントが大きいな 結婚生活  
もバツチリや

「つて料理中に何を考えてるんや!/? 料理に集中せな  
でもええなあ // / / / /

その後、はやての妄想は新婚生活から老後まで進んだそうな(笑)

「はやて SIDE End」

「フエリSIDE」

参りましたねえ♪

私は産まれたばかりで料理何かした事がないんですよねえ♪

女神様も魔法とか能力とかだけじゃなくて料理の知識も付けて欲しかったですぅ……

でも「こじで何もしなかったら悠夜ははやでちゃんと盗られちゃいます！」

知識は無くても愛情があればきっと美味しいくなるはず！-.

「取り敢えず、適当に色々と入れてみましょう」

フヒリの鍋からは怪しい紫色の煙りが吹き出ていた……

～フヒリSIDE END～

～悠夜SIDE～

何だろ?……

何だか嫌な予感がする。

はやては顔を赤くしてぼーっとしてゐし、フヨリに至つては鍋から妖しい煙りが出てゐる……

「……とにかく今は自分の料理を完成させよ!」

決して現実逃避した訳では無いからね……

そして各々、料理を完成させて食卓に着いた。

「まずは私からやな! もう 食べてみて!」

はやははハンバーグにサラダそれからゼリーを並べた。

「ふわあ～ はやはちやん美味しいですぅ」

フェリが歓声を挙げる。

確かにどれも美味しそうだ。5歳児とは思えない見栄えだ。

「悠夜君！ 見るだけじゃなくてはよ食べてな？」

「うん。 とても美味しいつい……

「じゃあ頂きますー！」

俺は早速、ハンバーグにナイフ入れた。

「凄い……チーズ入りだ……味は……うん……!  
美味しい」

そのハンバーグはまるで小さいころに母親が作ってくれた味を思い出させてくれた。

サラダもゼリーもとても美味しい、5歳の女の子が作る料理のレベルでは無かつた。

「本当に美味しいよー。はやては料理上手だね」

「ほんまか!? 良かった 悠夜君に気に入つて貰えて嬉しい  
わ フェリさんはどうですか?」

「美味しいです〜〜 はやてちやんは良いお嫁さんになりますよ  
お」

「ふえ!/? フエ、フエリさん!/? それは褒め過ぎやで……//

／＼

とはやでが顔を真っ赤にして此方をチラチラと見てくる。  
あれ？ もしかしてかなり懐かれた？

……でも逢つたのも今日が初めてだし、友達になつたのもつこせつ  
ひだし……氣のせいだろう。

和やかな雰囲気で次はフンリの番になつたが……

これは……何だ？

なにやらスープみたいだが、色が赤かつたり青くなつたり変色する  
し、酸っぱい匂い？がしたり固形物がアメーバの様に浮いている。

「…………」

「あはは……」

「わあ～ はやでひやんに悠久、食べてトセ～」

上から俺、はやて、フヨリである。

「……なあ？ 姉さん……これ……ナーニー？」

「料理名は分かりません！ 強いて言つたならジャイーンシチュード

です！」

何故お前がそれを知つている…？

「なあ……はまちて？」

「……ぢやね？」

「これ……食べるの？」

「あかん！？ うち今日は体の調子があかんねん！？ 悪いけど、それは悠夜君が食べてくれへん？」

はやて！？逃げたなー！？でも……確かに「れはせやてには食べさせられないな……

「…………」

「（あまんー！ 悠夜君……私には絶対無理やーー。）」

「ワクワク

仕方ない

確か毒消しとエリクサーがあつたよな?  
なら死にはしないだろ?。……多分(汗)

「いや……勝負……！？」

～～暫くお待ち下さい～～

「…………姉さん…………今度…………料理…………教えるよ…………」

あれは…………兵器だ…………

氣を取り直して俺の料理を披露する事になった。

「やあ、食べてみてくれ」

俺が作ったのはシンプルに和食にした。大根と鮭の炊き込みご飯に煮物に焼き魚、デザートに黒胡麻プリンを作った。

「美味しそうや……」

「ですうへ

良かつた……最初は洋食にしようかと思つたが、敢えて和食にしてみたが正解だつたかな？

「あはは、あらがとう　じゃあ食べてみてくれる？」

「そやな　じゃあ頂きます　」

「ままですー！」

2人はパクリと「」飯から口にした。

「.....」

「.....」

2人共、箸を置いてプルプルと震え始めた。

「（あれ？ もしかしてミスったかな……）」

俺がそんな不安に駆られ始めたその時……

「「美味しい～～」」

2人が同時に叫んだ。

良かつた……ミスつた訳じゃなくて……

その後、2人は喋るのを忘れて一心不乱に食べ始めた。

「悠夜君！－ お代わりや－－」

「私もお願いします～！－！」

そんな2人に微笑みながらお代わりをよそつて手渡す。

（悠夜SIDE OUT）

（はやてSIDE）

「こんなに騒がしくて楽しい」飯は何時以来やる?

そういえばお父さんとお母さんが生きていた時は毎日が楽しく暖かかった。

ふと悠夜君とフュリさんの方に視線を向けると……

悠夜君は微笑みながら私達が食べているのを見ているし、フュリさんは一心不乱にご飯をかき込んでいる。

何だかその光景を見ると胸が暖かくなり、何だか……

「はやでー!? ビーッしたー!? 何があつたー!?

え?  
?

「せやひやん泣いてるんですか～？ 何か辛い事があったんで  
すかあ？」

悠夜君とツンツン心配ついに説いてくる。

私はそれを聞いて手を頬に当たた…

あれ？ 私、何で泣いてるんやね？

こんなに楽しくて暖かこの辺何で…

そう考えていたらふと身体が暖かかい何かに包まれた。

「…………や、悠夜君…………？」「ひつたん？…………急に抱き締めたりして…………は、恥ずかしいやん…………」

私は茫然としながら悠夜君に話し掛けた。

「辛いなり泣いても些ことんだよ…………」

「そん…………な、うちは辛くない…………で？…………こんなに…………樂しいの」「…………」

ナリヒコながらも私の眼からはじぶんと涙が溢れてくる。

どうしたんやろ？　私は何処か壊れてるんかなあ？

おかしいな…………何で止まらへんのやろ…………  
ね父さんとお母さんが死んじゃった時も泣かへんかったのに…………

「はやで。我慢する必要は無いんだ……これからは辛い事があつたり悲しい事があつても俺達が付いてる。だから……泣いても良いんだ……」

そう言いながら悠夜君は優しく私の頭を撫でてくれる。

……そつか……「うちは泣いても良いんや……

そつ思つた瞬間、私はもう我慢が出来なくなり

「うわああああん！！？　お母さんが！！　お父さんが…？　うちを独りにしないで！？　うち、何でもするし、脚が動かなくなつても平氣や…！　だから…だから独りにしないで…？寂しいのはもう嫌や…！」

うちは何もかも忘れて、初めて感情の全てをさらけ出し感情の赴くままに叫び泣いた。悠夜君は何も言わずにうちを抱き締め続けてくれた。

第4話へ続く  
⋮

### 第3話（後書き）

因みに私はプロ野球のファンです（笑）

はやての阪 ネタは正直どうかと思つのですが、余り突っ込まない  
で下さい（汗）

それにも進むのが遅いなあ～

何時になつたら守護騎士に魔王様出るんだら？……

早めにプロフィールも出したいなあ～

では次回、お会いしましょう。

## 第4話（前書き）

何だか進みが遅いな……

気長にお付き合ってくれると有難いです。

## 第4話

その後、泣き止んだはやてはフニンとお風呂に向かい、俺は洗い物をしている。

はやては最初は、自分がやると言っていたが俺が許さずフニリとお風呂に入ってきたなど云えた。

フニリは大賛成してはやてを引き摺つて行った。

俺も誘われたが丁重にお断りした……

いや、いくら子供でも一緒に変だら……

今ではお風呂場からは楽しそうな声が洗い物をしている此方にまで聞こえてくる。

「良かった……フニンのやつ上手くはやっての氣を紛らわしてくれてるみたいだ……」

はやては今まで友達が居なかつたらしく、明るくしてはいるがこうこう経験が無かつたらしく、どこか無理をしている空氣があつたが今ではその様子は見られない。

「フェリに感謝だね……男の俺だけだつたらこうはいかなかつたし、フェリの天然な明るさは俺には出せない……」

まあ、あいつの明るさはバカっぽく見えるけど、人にはそれが大切だ。

俺は洗い物を終えると食器をしまい、紅茶を入れて懐から本を取り出して読み始めた。

因みに本は女神が家の本棚に用意してくれた。

本棚と云つてもそれは小さな図書館みたいに広く沢山の本が置いてあった。

魔法関係や能力の詳しい事が書かれた魔法書、デバイス関係といった様々な役に立ちそう本ばかりだ。

「しかし、小説や詩集はまだ良<sup>い</sup>けど漫画はまだひどい……」

いや、漫画もまだ良い……問題が有のはどう見ても子供が見て良い物では無いものが存在した。

「あれは見なかつた事にしよう……後で処分しておかないといね……」

あれを最初に見た時は余りの酷<sup>ひど</sup>さに頭痛が走り、女神に向かって怒鳴り込みに行きたくなつたくらいだ。

「思い出したら、鳥肌が……もつもめよ……」

俺は余計な事を考えるのは辞め読書に集中した。

～SIDE OUT～

～フエリ SIDE～

今、私とはやてちやんは一緒にお風呂に入っています。

最初は悠夜も誘ったんだすがあつさつと断られました

残念だけど次は必ず一緒に来ますからねえ～

「あの、フエリさん？」

「何ですかあ？ はやてりやん 「

「あの…… わたしもすこませんでした！… 見苦しい所をみせて  
しゃつへー！」

はやてりやんは少しつらこながら頭を下げる。

まつたく本物の世界の娘達は子供らしくないですねえ……

なのはちゃんやフロイトちゃんにも言えるし事ですけど、もう少し周りの人には甘えたり我が儘を言つたつとか子供らしい所があつても良いはずですよ～

「はやてりやん～？ 何でそんな事を言つですか？ 悠夜も私も全然、気にしてないですよ～」

「だつて、うち……沢山泣いてしまひたし、迷惑掛けてもうた……」

やつぱり考え方が大人ですね……今までの状況が状況だけにそうちでやがる得ないのは仕方ありませんが……それだと哀しいです……

「はやてちやん…… 誰が迷惑をかけたんですか？ 何でそういう思ひですか？」

「だつてあんなに沢山、泣いてもうたし…… 悠夜君にも迷惑掛けてしまった……」

もう一

はやてちやんはもう少し我が儘を言った方が良いですよ。

それにしても悠夜君にもですかあ～

これから、悠夜が一緒に居るなら心配は無いですかねえ～

「はやてちやんつてもしかして悠夜の事が好きになつひやこまつたかあ？」

「フユ、フユリさん！？何でいきなりその話しこなるんですか！？ かつ、関係ないじやないですか／＼／＼」

あらあら真っ赤っかですねー

可愛いんですけど、私には余り嬉しくは無いですね……

「むう～！？ はやてちやんが素直にならないなら考えがあるですう～！？」

私は心ついでめぐらしくはやてちやんを撫り始めた。

「うよつー？ フユさんやめ…………あ、あははは！」

「参りましたかあ～？ 参つたなら私の事はせん付けしないで呼べですう！」

「フニ、フニっさん！？それ関係な……キヤハハハ！？」

「どうですかあ～？ 呼ぶ気になりましたかあ？」

「キヤハハハハハハ 呼ぶ！ 呼びますからもひ辞めてええ！」

「分かれば良いですよ お友達に遠慮は要らないですう～」

「フニっさん……おおきい！」

「ハ・ヤ・テちゃん……？」

「すんません… つい……じゃあ、フニリちゃん宜しくな～」

ちゃん付けですかあ  
まあそれ位なら構いませんかねえ

そうして2人はお互いに身体を洗つたり、はやてのお笑い話しひ  
フェリが爆笑したり、楽しく入浴を済ませた。

「フエリ SIDE OUT」

「悠夜 SIDE」

そういうばはやての脚が悪いのは夜天の晝の改竄のせいだったよ  
な?

なら今之内に何とか出来ないかな?

「（魔法関係の事はまだ良くなきは分からぬけど、フェリなら詳し

いよな？ 後で訊いてみるか……」

幸い、魔法関係の資料や本は沢山用意されていたので、あの別荘とやらを使いながら知識を付けて修業に励めば俺の潜在能力ならこの世界を変える事も容易であるとフヨリは言っていた。

「（そんな事を言われても実感が湧かないけどね）」

だが俺に少しでも力があるのなら少しでも良い世界になるよう、子供が笑って居られる世界になれる様に努力は惜しまないつもりだ。

そう考えてこむとはやて達がお風呂から帰つて来た。

「ただいま 悠夜君、食器洗つてくれてありがとうな」

「ああ、構わないよ。それから紅茶を勝手に貰つてるよ」

「それこそ構へんでもちつとも悠夜君の煎れた紅茶が飲みたいなあ～？」

「あっ、私も飲みたいですぅ～ 悠夜～ 煎れた下さい～」

「分かっただよ。今、煎れるから……」

俺は立ち上がりと紅茶を煎れに台所に向かった。

俺は手早く紅茶を用意するとフロリの隣に座って話しかけた。

「そういうえば姉さん、そろそろ時間が時間だしさそれ飲んだら帰るわ～？」

すでに時間は10時近いはやてもそろそろ寝る時間だし俺も流石に色々とあつたので疲れている。

「もう そんな時間ですか…… 確かにはやでちゃんもお休みの時間ですねえ～」

フヨリも壁に掛けられてる時計を確認しながら残念そうに呟つた。

すみとほやてが……

「なあなあ、今日はもう遅いし家に泊まつてかへん?」

と何やらわざわしながら訊いて来た。

「え、 本当にですか？ 私は泊まりたいですぅ」

少しは遠慮する事を覚えろよ……

「姉さん……少しは遠慮しなひつよ。なあ、はやて……迷惑じやないか?」

「そんな事はあらへんよ　いつもフンつかやんと悠夜君とやら少しそうに居たこし……迷惑なんかあらへん！」

「姉さんは少し自重する事を覚えてよつけ……じゃあね、悪いけど泊めてくれるかな？」

「勿論やー、じゃあ悠夜君もお風呂に入つて来たらええよ。うちはベッドの用意しておくれから」

「俺ならそここのソフトウェアで構わないけど……」「

「駄田やー 風邪引いてまつで？ ちゃんと用意するから大丈夫  
やー」

「分かつたよ。じゃあ姉ちゃん、はやく手伝ってあげて？」

「任せとけーー しっかりお手伝いしますから安心してお風  
呂に入つて来て下せーーー！」

「2人共宜しくね？ じゃあ行つて来るよ」

もう一つと俺はお風呂場に向かつた。  
俺はその時、フヨリとはやでが何か企んでいた様な顔をしていたの  
には気付けなかつた……

「フヨリちゃん……」

「分かってますよ！　はやてちゃん」

そう言つと2人は寝室に向かつた。

俺は風呂から上がると  
2人は仲良くテレビを観ていた。

「あつ、上がったんや、どうだつた？」

「良い湯加減だつたよ。気持ち良かつたよ

「それなら良かつたわ 次は悠夜君も一緒に入ろうな」

……何故、一緒に入りたがるんだ？

どちらかと言つて俺は風呂は一人でノンビリ浸かるのが好きなんだ  
けど……

だが、はやての顔を見るととも楽しめてこじる様子が見られ  
る。

何で答えりや思ひんだ？あの表情を見せられてしまふのも難しい

……

「……まあ、その内ね。機会があったら

「約束やで！ フンちゅんも聞いた！？」

「はい！ バツチリですう～」

何かやけに仲良くなつてないか？  
何時のためにフンちゅんも聞いた！？

……

「取り敢えず、そろそろ寝まつか？ もづ遲こじめ……」

「ほんまや……そつこえ、まづさつきから寝たへなってきたわ……」

はせてもすっかり寝そつで畠をクシクシと擦つてこる。

「私も寝くなつましたあ……」

「それじゅそろそろ寝まつか…… 悠夜君付いて来て……」

はやてに付いて寝室に入つて行くとそこには少し大きめなベッド  
が一つ置いてあった。

「ねえ……はやて……」の部屋つかれ……もしかするとまでの  
部屋だつたりしない?」

その部屋は密室とは違い、本や小説、小物などいかにも女の子部屋つて感じがした。

「ん~？ やひかよ.. 此処はひつかの部屋や.....」

はやては今にも眠そうな感じで答えてくれた。

「いやれ.....僕は何処で眠れば良このかなつて思つてや.....」

「何を言つてゐるや.....やいのベッドに決まつてゐやないか.....」

「誰が?」

「悠夜君が.....」

「はやてと姉さんは?」

「ナニのベッヂ……」

「一緒に……寝る……の? もしかして?」

「当たり前やないか……他に何があるん?」

はやては句を当たり前の事をといった顔をしている。  
まあ、5歳なら確かにそうだろうな……

「姉さん……」

俺は内心呆れながらフフリを見ると……

「~~~~~」

明らかに誤魔化そつと鼻歌なんか歌つてるよ……

『なあフェリ？ 誤魔化そつとしてるのは良いけど……少し  
良いか？』

俺はフェリに教えて貰つた念話で話しかけた。

『どうしたんですかあ？私は何も知りませんよー』

俺はそれを聴きながらはやてに

「まあ……良いかな。はやて寝よつか？」

やう言つながら素早くベッドに入る。

『悠夜～？ 一体、何ですか～？ 一緒に寝るのが嫌だつたん

じゃないんですかあー?』

『それは諦めた……はやてのあの顔を見たら断れないしね……』

そのはやては既にベッドに入ると……

「う~ もう既にしお休みな悠夜君、フヨリちゃん……」

と既に可愛らしく寝息んしている。

因みに並び方ははやてが真ん中で左が俺、右がフヨリになつて  
る。

最初、フヨリも俺の隣が良いと騒いでいたが、自重して貰つた。

『フヨリ、夜天の書は今から何とか修復とか出来ないかな?』

そういえば、俺は本棚に置かれた一冊の魔法書に向ける。

『成る程、そういう事ですか。ちょっと待つて下さーね』  
『ちやんが寝入ったら調べてみましょ~』

『分かった……頼む……』

そして暫く時間が経つとはやでが完全に寝入ったのを確認すると、俺達は静かにベッドから抜け出した。

『じゃあフエリ頼んだ……』

はやでが起しきなーにようして話で話しあげた。

『はー！ お任せ下さー！ では調べますよ~』

そう言ってフエリは夜天の書を手に取ると皿を瞑つて集中する。

すると夜天の書が淡く光り出しふエリの手から離れ浮かび上がる。

その状況が暫く続き、5分いや10分かもしれないが時間が経つ  
ていくと……

そして漸く夜天の書がフエリの手の中に戻る。

『どう? 何とかなりそうかな?』

俺がフエリに尋ねるとフエリは閉じていた瞳はゆっくりと開ける。

『そうですねえ まず一言で言つなう私と悠久なら修復するのは  
可能ですか?』

その言葉に俺はほつと息を吐いた。  
だかフェリの言葉には続きがあった。

『ですが、現在は難しいですねえ……』

『どうして?』

『それはですねえ 今、現在ですけど夜天の書は起動出来ないで  
すう、夜天の書の管制人格さんにも話しかけましたが今は眠つて  
いる状態ですね』

『そつか……因みに起こす事は出来ないかな?』

『私と悠久の魔力で無理矢理起動する事は出来ますけど……お勧  
めは出来ませんねえ』

『どうなるんだ?』

『かなりの普段がはやてちゃんと夜天の書に掛かります。　夜天の書は破壊、はやてちゃんは最悪……』

夜天

『セシドフヨリは声を詰まらせた……』

『分かった……もつまわなくて良い……』

俺はそつ抜えるとフヨリの持つ夜天の書に視線を向けた。

『全く……夜天の書ははやてを苦しめるが大切な家族を『』える……夜天も望んだ訳でないだろ？けど、皮肉な話しだね……』

『マスター……』

『感傷に浸つてる場合じゃないね……　フヨリ、じゃあどうすれば良いかな？』

『はやてちゃんには可哀想ですが暫く様子を見て起動状態に入つたら私達で修復するのが今のベストだと思います』

様子見か

気に入らないけど、はやてとこれからはやての家族となる人達を考えるとそれしかないのか……

『…………分かった。そうしよう。その間、俺は知識や力を付けるよ……』

『はい！ マイスター悠夜！ 私も守護騎士も力を貸します』

『ありがと…』

俺は必ず力をする……世界全てを護るのは傲慢かも知れない。  
だけど……子供が傷つき一部の腐った大人が自分の欲望で世界を滅

ぼ  
す  
…

そんなのは認めない……自分もそれが単なるエゴイズムに過ぎないのは分かつている……  
けど、俺は自分の信じる道を行く……

俺はこの世界に来て、分からぬといつ理由で逃げない事を誓い、  
決して自分の理想を曲げない事を誓った。

## 第4話（後書き）

突然なんですが、小説式と台本式ってどちらが良いんですかね？

初心者なんで教えてくれると助かります！

では！

## 第5話（温故知新）

えいじは懲り十を玉にあつた。  
わがじとじかせ……

## 第5話

翌朝……

俺とフエリははやてに朝御飯をば馳走になつた後、はやての家を後にした。

はやては残念がつたが引っ越しの荷物整理もしなくてはならないし片付けが終わつたらまた来るよと言つた。

はやては「必ずやで……」と少し淋しそうな表情を浮かべていたが、帰る時には満面の笑顔で送ってくれた。

「なあフエリ？　はやては凄くっこ子だね……」

「そうですねえ～　それに凄く頑張りやさんです

「……あの笑顔は護りたいね……」

「はいですう　頑張りましょーーー・マスター」

フヨリと話しながら歩いていると血弔の前に着いていた。

「相変わらずだけどカイ家だね……」

「良いじゃないですか せっかく用意してくれたんですけどから

」

俺はそうだねと言いながら改めて眺めると……

「表札も何時の間に……」

昨日は夜で気付かなかつたが、そこにはしっかりと月神と記された表札も付いていた。

「その辺もばっちりです、うー

」

俺はフェリの言葉に頷きじやあ入るつか？と話題としたひり……

「あの、すいません」

と後ろから声を掛けられた。

俺は振り返るとそこには、紫掛かつた長い髪を純白のヘアバンドをした自分と同い年位の女の子とその娘が成長して少し活発になつたような感じの年上の女の子が立っていた。

「はい。なんでしょうか？」

と俺が返すと

「えーと、私達はそこに向かいに住んでる田村っていうんだけど貴方達はそこ家の子？」

と年上の女の子の方が訊いて来た。

「はい。 そうです。 『挨拶が遅れました。 僕は月神悠夜と云います。 それと姉の月神フユリです。 宜しくお願ひしますね』

「宜しくですよ」

俺が挨拶をすると年上の女の子は一瞬ボカーンとした表情をした  
が、直ぐに戻し

「『れは』『れは』」丁寧に、私は月村忍よー 宜しくね」

と忍さんは挨拶をしてくれたがもう一人の女の子はもじもじと恥  
ずかしそうに顔を赤らめて俯いている。

「ちよつとすずか……恥ずかしがつてないでけやんと挨拶しなよ」

そう言われて女の子は顔を上げたがまだ恥ずかしそうに黙った。顔と俺の方をチラチラと見ている。

俺はゆっくりとその女の子に近付くと

「……」  
「……んにちは　僕の名前は月神悠夜って言つんだよ。良かつたらお名前を教えてくれるかな？」

と女の子に緊張を与えない様に優しく話し掛けた。

…………するとい。

「あ、わ、私は……月村……すずかって言います

と緊張しながらも答えてくれた。

「すずかっていふんだ? 可愛い名前だね すずかちゃん宜しく  
ね」

そう言つて微笑むと最初は緊張していた顔が徐々に笑顔に変わつ  
ていき

「うん! 宜しくね! 悠夜くん!」

先程とは違ひ笑顔で答えてくれた。

「きみ悠夜君だつけ? 淫いねえ、すずかは人見知りが激し  
いのにもつ懐いてるよ~」

「あ、お姉ちやん! ?」

からかう忍さんと恥ずかしそうに忍さんに詰め寄るすずかちゃん。  
仲が良いだなあ…と見つめていると不意に忍さんと田があつた。

「あ！ ゴメンね！」

それにしてても悠夜君は凄く落ち着いてるね。  
それに、最初は凄く綺麗だし女の子だと思つたよ

「俺つてそんなに女顔かな……  
とショックを受けていると。

「そうですねえ、悠夜はとても綺麗だから仕方ないです」

「グサツ！？」

「フエリ……お前は……！」

「そりですよねー フエリさんもそりゅうつまますよね？」

「私の事は敬語は必要ないですよ」

「本当ー? じゃあ私の事も忍って呼んでね」

すっかり仲良くなつたなと思つてこんなこと腕を引かれてもうらに手を向けると

「あの……私はカッコいいと思つよ……?  
髪の毛も凄く綺麗だし……」

と俺の髪を褒めてくれた。

この娘は凄く優しい娘なんだな……

「ありがとー!」

すずかちゃんも凄く可愛いしとても綺麗だよ

「あ、ありがとー!」

「あ、ありがとー!」

恥ずかしそうだが嬉しそうに小さな声で言つた。

「へえ～ そうなんだ。

「両親はもう亡くしていて2人だけで暮らして居るんだ？」

「はい。 でも両親はこんなに立派な家を遺してくれましたし、姉さんも居るし、それにもう少ししたら亲戚の人が来てくれますから」

「凄いね悠夜君は…… 私だったら絶対に泣いてるよ……」

あの後、立ち話もなんだからと云つ事で2人には家に来て貰つた。

2人も流石の広さに少し驚いていたが直ぐに慣れ今はソファーに座つて紅茶を飲んでいる。

……勿論、用意したのは俺だよ？

「それでその親戚の人達は何時来るの？」

「そうですねえ、  
もうそろそろ来る筈ですねえ～」

「そうなの？」

「じゃあ準備とか大変でしょ？ 手伝おつか？」

フェリの言葉に忍さんが答える。

「大丈夫ですよ

後は簡単な荷物の整理だけですからあ

」

「そう？」

じゃあ私達はそろそろ帰るけど、何かあつたら何時でも呼んでね」「

「悠夜くん、またね。

今度は家に遊びに来てね」

そう言つと2人は自宅を後にした。

「さてと……

じゃあ守護騎士を召喚するか。 フェリ、先ずははどうしたら良い? 「

「それは簡単です!

悠夜の身体に魔力を流して呼び掛ければ悠夜の身体にあるアルトネリコが作動しますから」

「随分と簡単なんだね。もっと色々な手順があるのかと思つたよ」

「本来は面倒な手順を踏むのですが、 悠夜の身体の内で一体化してるので話は別です(?)」

「じゃあテバイスとしての機能は?」

「無いですねえ  
私とコニゾンするしか無いですねえ」

「やつぱつね……

話を聞いて疑問に思つてたし、じゃあ作るしかないかな……

「悠夜なら簡単です!

俺に作れない物などないですから

「なんだそりゃ……」

まあ、この家には資料もあるし材料も揃つてゐる  
なら何とかするしかないね……

「じゃあ始めよ!……」

そう言つと俺は自分の身体に魔力を流してアルトネリコを起動させる。

くつ！？

起動させた途端、身体に物凄い魔力が流れて来るのを感じる。

それに何だ！？

この映像は！？

頭の中に崩れていいく一つの大陸が崩壊していく姿が浮かぶ。

沢山の人人が死に絶えていくなか、2人の少女の姿が映る。

その少女達は背中合わせに詩を唄いだす。

……綺麗な詩声だな……

自分も今まで歌手として色々な詩を唄つてきたが、ここまで綺麗で暖かい気持ちにさせる詩は初めてだ。

次第にその少女達の元に物凄い魔力が集まって行く。

次第にその魔力は天に昇つて物凄い光を発した。

そうして光りが薄まって行くとそこには一つの大陸が出来上がりつていた。

これが詩魔法か

俺は初めて自分の持つ能力の凄さを感じると同時に恐ろしく感じた。

これは自分には過ぎた能力だ……

この能力は世界を救う事も破壊する事も簡単に可能にする。

俺に扱い切れるのか？

余りにも強い力に俺は不安感に苛まれた。

……………とその時……

『大丈夫ですよ主……』

突然、頭に声が響いた。

……誰だ？

それに今の映像は……

『貴方が見たものは此処とは違う世界で実際に起きたもの……』

だったら尚更あんな力は使いこなす自信がない……

『大丈夫です。

貴方には使えます……

それに貴方にはこの能力が必要になります。

何故ならこれは全て決まっていた事ですから……』

それはどういう意味だ？何故、貴方に分かるんだ？

『それは何れ貴方が答えを出す時に分かるでしょう』

それって一体……

『何れまた逢いましょう。詩魔法は貴方の心そのもの、忘れないで下さい』

待つてくれ！？

貴方は……………だ……………れ

その瞬間、目の前が光り輝き次第に俺の意識が離れて行つた。

.....!?

何か聞こえる  
人の声か？

「ま.....たー！？」

この声はもしかしてフェリカ……？

「マスター！？ しつかりして下さい！？ マスター！？」

そんなに耳元で騒ぐなよ……  
そんなに騒がなくても聞こえてるよ。

次第に頭のもやもやが晴れて来て、思考がクリアになる。

「フヨリかい？

聞こえてるから騒がないでよ……」

「悠夜！？ 気が尽きましたか！？」

「大丈夫だよ……  
心配をかけたね……」

「悠夜が大丈夫ならそれで良いですぅ～」

フヨリがそう言つとニコリと微笑んだ。

「うめんね。

所であれからどうなつたのかな？

記憶が曖昧で……」

「そうですねえ」

守護騎士達はちゃんと召喚されましたよ～

本当は自分達も悠夜に付いてるつて言つてたんですがリビングで待機して貰つてますう

「そつか……

ちゃんと召喚できたんだね。呼んで貰つて良いかな？」

「大丈夫ですよ！

今、念話しといたので　　「悠夜！～？」　……來たみたいですねえ

フヨリの言葉を遮る様に『バタン！』と扉を開けて男女4人が入つて来る。

「悠夜君！！」

無事で良かったよお～

心配したよお～」

「スフィール……

心配しちぎ…… 悠夜があれ位でどうとかなるはずない……

「まあ良いじゃないですか 悠くんが大丈夫なら」

えつと……

彼女達が守護騎士なのかな？

因みに最初に声を掛けて来たのが金髪の少女で見た目が10代後半位で俺にしがみ付いて良かつたを連呼している。

それを嗜めたのが黒髪で両サイドを三つ編みにしている俺と同

い年位の女の子が冷静に突つ込み、微笑みながらフォローを入れたのがスフィール？と呼ばれた少女と同い年位か少し下くらいの銀髪の少女だ。

因みに一番後ろには落ち着いた感じの20代位の男性が腕を組んでこちら眺めている。

「え～ リリアちゃんだったずつとソワソワしてたじやない！」

「そんな事ないです……スフィールの勘違いだよ……？  
氣のせい、妄想、ボケたんじやないかな……？」

「嘘だよー！」

リリアちゃんすっと立つたり座つたりって落ち着きがなかつたじやん！」

「あれば……

ちょっと身体を動かしていただけです。  
スフィールは妄想のしすぎで脳が腐つたんじやないかな……？」

「リリアちゃんが苛めるうへへへ」

そう言つとスフィール？が泣き付いて来る。

「おおおお……」

俺は余りにも急な展開についていけないと……

「スフィールにリリア、主が戸惑っていますよ。先ずは挨拶が先でしょう」

今まで後ろに控えていた落ち着いた感じの青年が2人に話しかけた。

「あつ！！」

「めんね！私の名前はスフイール、悠夜の守護騎士めんで監のリーダーなんだよ！」

「私はリリア

悠夜の奴隸なんだよ……

あの馬鹿の事は気にしないで……」

「あたしはシュレリアです！ 悠夜君宜しくね」

「最後に僕ですね。

僕はファイルスと云います。御身は主の為に……」

あれ？

リーダーって彼じゃないんだ……

あの何となく頼りなさそうな金髪の彼女がリーダーなんだ……

「悠夜

その疑問は間違っていないよ……

スフィールは馬鹿だから……」

「リリアちゃん……？」

それはどういふ事かな？

「どうも向も本当の事を言つただけだよ……？」

皆もやう思つよね……？」

リリアがそいつとフンリを含めた皆が苦笑いしながら明後日の方を向いた。

「みんな酷いよお～

悠夜はそう思つてないよね！？」

「えつと……」あんね。俺はまだよく分からなーんだナビ……」

「良かつた

悠夜は私の味方だね！」

「スフィールはやっぱり馬鹿でアホですね。

悠夜の言つた事を聞いてないよ?」

リリアって結構、毒舌だね……

「リリアちゃんは神経質なんだよー そんなどと悠夜に嫌われちゃうよお~」

「むつ…………!?

そんな事はないよ……

悠夜は気にしないよね?」

また喧嘩が始まった……

「ねえ……喧嘩はしないでくれるかな?

俺達はこれからは一緒に暮らしていく家族なんだからや。仲良くしようよ

俺がそいつを2人は仲良く「はーい」と返事をしてくれた。

こうして俺に新しい家族ができ、新しい生活に向けて騒がしく、それでいて楽しく始まった。

## 第5話（後書き）

次回はオリキヤラの設定を出す予定です。

もしかしたらネタバレとかもあるかもしませんのでそれが嫌な人は気を付けて下さいね。

## オリキャラ設定（前書き）

まさかデータが消えるとは……

遅くなつてしません。

今回は設定となつております自分の独自の解釈と設定となつていますので、ご容赦下さい。

## オリキヤラ設定

名前：月神悠久

年齢：6歳（23歳 転生前）

生年月日：1月22日

性別：男

血液型：AB型

星座：水瓶座

身長・体重：116cm  
23キロ（187cm 68キロ 転生前）

C・V：?

歌声イメージ：志方あき

他多数

魔力ランク：SS+（リミッター時はAAA+アルトナリコ発動時は測定不能）

髪色：銀髪

瞳：紫色

容姿：FFのカダージュの髪が長い感じ  
中性的で女性に間違えられることが多い。男女ともに物凄くもてる

性格：基本的に落ち着いているが天然な所がある

楽器とか弄つたり曲を書いていたりする時は時間を忘れて没頭する  
恋愛事には鈍感ではないが余りにも人気があつたため抜けていると  
ころがある。

デバイス：ユニゾンデバイス”フェリ” アルトネリコ（悠久の  
体内に埋め込もれていて通常の“デバイス”みたいには発動出来ない）

特技・趣味・料理、読書、楽器演奏、作曲、小麦粉をちねつて米を作り（笑）

好きな物：激辛系の食べ物、歌う事、楽器全般、皆の笑顔 ファン  
サービス、知識を養う事

嫌いな物：牡蠣、遅刻、ドラマの収録、約束を破る事、無人島生活  
(以前の収録で一緒になつたある芸人が理由) ヤンデレ（本人は  
気付いていないが死ぬ間際のアレが原因か）

スキル関係：詩魔法、時空開閉（王の財宝みたいな感じ） 魔法の才能（全ての魔法を扱う事が出来る） 道具の知識（色々な道具を使つたり使用出来る）

他にあるが不明

オリジン：詩魔法を紡ぎ発動出来る人種をレーヴァテイルと言いオリジンはその中でも特別で18歳程度で成長が止まり、生命維持が塔によつてなされるので崩壊しない限りは永遠に生き続ける。

他の特徴として能力が非常に高い。

本来、レーヴァテイルは女性しかいないのだが女神に無理矢理に改造された（笑）そのせいか容姿が女性ぽくなつた。

インストールポイント：本来は他のレーヴァテイルが生命維持に必要な延命剤を打ち込む為にあるポイントなのだが悠夜とインフェルス達は魔力を回復するために使う。 それぞれポイントが違う。  
悠夜のポイントは脇腹。

備考：転生前はその世界でトップアイドルだった。優れた容姿に楽器演奏、更には天使の歌声と呼ばれる程の美声で圧倒的な人気を誇つた。

……が本人は自然体で人が自然と集まる不思議なカリスマがある。知能や運動神経も素晴らしい、転生前から完璧人間といわれていた。背中には生まれた時から不思議なアザがある。

## 詩魔法について

レーヴァ テイルと云われる人種が自分の心で詩を紡ぎ発動する魔法。悠夜はその中でも特別なオリジンと云われる人種でその威力は比較にならない。

## アルトネリコについて

詩魔法を管理している塔であり、全ての詩魔法がそこには収められている。

その魔力は甚大であり世界を簡単に崩壊出来る程であり、無理矢理に取り出すと世界は滅ぶ。

デバイス扱いになつてはいるが武器やバリアジャケットは精製出来ず、魔力の源、詩魔法のサーバーみたいな役割となつている。

名前：月神フェリ

年齢：不明

生年月日：7月4日（本来は不明だが悠夜が無いのは可哀想との事で出会つた日を誕生日にした）

血液型：？

星座：双子座

身長・体重：30センチ位（変身時は132センチ位）体重は…  
「秘密なのですよ～」

C・V・堀江由衣さん

歌声イメージ：ほぼ一緒

魔力ランク：A A +

髪色：董色

瞳色：空色

容姿：イメージはスパイ럴の竹内理緒ちゃん、喋り方は某あつあ  
う神

性格：天真爛漫だが時々、黒い。

普段は子供みたいだが意外と大人な意見を言つ時もある。

デバイス：ストレージデバイス

『セイクリッドティア』

魔道書型の「テバイス」であらゆる魔法が書かれており、アルトネリコから詩魔法を引き出す事も可能である。

魔法形式：古代ベルカ式、ミッド式、詩魔法

魔力光：白色

魔力資質：不明

特技・趣味：未定（生まれたばかりのため）  
にはまつているそうです。  
だが唄う事と料理

好きなもの：マスター、マスターの料理と歌、甘い物、お昼寝、家族、ノアお姉さま（笑） フエリ「これは公式設定ですか？」

嫌いな物：マスターをいじめる人、人を傷付ける人、お昼寝を邪魔する人（フエリ「私の眠りを妨げる人は嫌いですぅ……マスターは別ですよ！」）

スキル：不明

インストールポイント・フェリ「私のポイントは腕です」

備考：悠夜のユニゾンデバイスであり、アルトネリコの管制人格である。

悠夜は原作の知識がないがフェリは少しだけあるようだ。  
魔法の知識もあり悠夜に教えている。

最近のマイブームは料理と歌う事みたいだ。

名前：月神スフィール

年齢：不明（見た目は17歳位）

生年月日：12月24日（本来は無いのだが悠夜の提案でそれぞれ  
作った。スフィールは何故かこの日を大熱望して決まった）

性別：女性

血液型：不明

星座：山羊座

身長・体重・163センチ体重は笑いながら殴られたため不明……

C・V：平野綾

歌声イメージ：一緒

魔力ランク：SS

髪の色：金髪

瞳の色：碧眼

容姿・アルトネリコに出るオリガがイメージ

性格：清く正しくそして馬鹿（笑）  
基本的に能天氣で天然。

デバイス：アームドデバイス『ハインズフェイト』魔力を通す事で  
ムチ状の魔力を発する

A・Iは女性型で待機状態は腕輪

魔法形式：ベルカ式

魔力光：赤

魔力資質：不明

特技・趣味：編み物、料理（意外とかゆ～な！？　スフィール）  
十秒で寝る

好きな物：勿論、悠久だよ

スポーツ全般、お笑い番組音楽関係

嫌いな物：自分を馬鹿という人、ゴキブリ外人（英語が喋れないと  
め暴走する）

スキル：野生の感（戦闘では頭を使う事が苦手で感が物凄く発達した） 絶対お馬鹿解答（本人は眞面目に答えるのに必ず天然発言になる） 後はまだ不明

インストールポイント：スフィール「え、 あたしのポイントが知りたいの～？……しようがないなあ」 悠夜にだつたら教えていいよお～ あっ！ でもその前にさあ～ 「以下、 関係ない話しが三時間続いたので省略。 ポイントは背中

備考：悠夜のアルトネリコの守護騎士『インフェルス』の一応リーダー

天然ボケで愛すべき馬鹿なのだが実力はトップクラス悠夜至上主義で頻繁にリリアと喧嘩をしている。

何故、彼女がリーダーなのかは月神家の七不思議に認定された（笑）

名前：月神リリア

年齢：6歳（実年齢は不明）

生年月日：1月22日（本人が悠夜と同じ日にこだわったため）

性別・リリア 「女に決まってる……そんな事を聞くなんて頭が腐つてるんじゃないかな……？」

血液型・不明（リリア曰く私の体は悠夜で出来ていると発言）

星座・水瓶座

身長・体重・106センチ20キロ（本来はスフィールと同じ位の体型なのだが悠夜と同じ年齢の方が一緒にいられるためにこの体型になつた）

C・V・富崎羽衣

歌声イメージ・基本的に一緒

魔力ランク・AAA+（ヤンデレが発動した時は不明）

髪の色・黒髪で両サイドでツインに結んでいる

瞳の色・黒

容姿・アルトネリコにでるミシャがイメージ

性格・基本的に無口で冷静だが悠夜の事を病的なまでに愛し、初めての挨拶が私は悠夜の奴隸宣言と危ない発言をしたが、他の人に 대해서は素っ気なく悠夜には甘えたりと色々と危険な少女、悠夜に女が近づかないようにこの姿になつたりと色んな意味で危険？な幼女

デバイス：  
『ソウルスレイヤー』

全長2メートルくらいの大鎌型のデバイス  
基本的に接近戦がたの機能になつていて  
A・Iは男性型で待機状態は髪飾り

魔法形式・古代ベルカ、詩魔法

魔力光・漆黒

魔力資質・不明

特技・趣味・尾行、悠夜の観察、読書、悠夜に近づくやつの抹殺（笑）

好きなもの・悠夜の全て、水羊羹

嫌いな物・悠夜に近づく物全て（家族は我慢する）スフィール（笑）（何故か馬が合わないらしい）ピザの先つちょ

スキル：詩魔法、リリアゾーン（悠夜に誰かが近づいたら何処からともなく現れる。半径3キロ位が範囲内）

インストールポイント・リリア「それを知つて良いのは悠夜だけ…」

備考：守護騎士『インフルス』が誇るヤンデレちびっこ騎士。

悠夜以外はどうでもよく何時も悠夜にくつ付いている。

設定上は悠夜と双子という事になる。

基本的に戦闘や普段の生活では大人しく無口なのだが悠夜の事になると残酷で狂気的な態度になる。

他の守護騎士に対しても「悠夜には私が居れば必要ない……」と公言してるが、嫌っているわけではない。

名前・月神シユレリア

年齢・不明（見た目は15歳位）

生年月日・5月12日（理由はたまたま家にあつた雑誌で水瓶座との相性が良いのが牡牛座だつたため）

血液型・不明

星座・牡牛座

身長・体重・153センチ、体重は涙目で睨まれたため割愛。

歌声イメージ：無

魔力ランク：AAA

髪の色：銀髪のストレート

瞳の色：灰色

容姿：イメージはアルトネリコに出るシユレリア様のまんま……考  
えるのが面倒になつた訳ではないですよ（汗）

性格：真面目で素直で一番まともな性格をしている。普段はしつか  
りしているのだがとんでもない方向音痴で自宅で迷子になつている。  
悠夜にはだけは甘えたりするが、スフィールとリリアの争いが激し  
いため目立つてない……

デバイス：アームドデバイス

『シャドウビュレット』

銃型デバイスで遠距離、中距離、近接と全てに対応でき、魔力をレ  
ーザーのように発射する。

A・エは女性型で待機状態は指輪になつていてる。

魔力形式・ミッドとベルカのハイブリッド式

魔力光・黄色

魔力資質・雷、炎

特技・趣味・ぬいぐるみ収集、お料理、ゲーム、楽器演奏

好きなもの・家族、悠久、可愛いもの、ドラ エ、散歩

嫌いな物・ところてん、迷子、ミニシタ、改造プレイ（こだわりの  
ゲーマーの為（笑））、連コイン

スキル・詩魔法、絶対方向音痴（彼女が1人で出掛けたら帰つて來  
る事は無いであろう……）ゲーマーのプライド（強そうな人を見  
付けたら対戦しなくてはならない。そう語つた彼女の横顔は凜々し

かつた……（

インストールポイント・お腹

備考：騎士達の中ではまともな性格をしているが、のりは悪く無い。基本的に何をやっても直ぐに覚えたりと優秀なのが突出しているのが射撃とゲームの腕と方向音痴のレベルだけ……

器用貧乏な所があるが昼夜にはとても大切にされている。生粋のゲーマーであり暇があればゲームをやっており、ゲーム全般が好きで彼女の信念は改造はゲームにあらずと語っている。

名前：月神フィルス

年齢：二十代前半くらい

生年月日：11月20日（ダーツで決めた）

性別：男

血液型：不明

星座：蠍座

身長・体重：180センチ86キロ

C・V・森川智之

歌声イメージ：歌わない為無し

魔力ランク：不明

髪の色：茶色

瞳の色：ダークブラウン

容姿：スパイナルの鳴海清隆がイメージ

性格：落ち着いた大人の男性みたいだが、何処か掴み処の無い感じがある。

デバイス：不明

魔法形式：不明

魔力光：不明

魔力資質：不明

特技・趣味・実験、  
読書、研究

好きなもの：実験、改造

家族

嫌いな物：他人に詮索される事

スキル：不明

インストールポイント・無し

備考：インフェルスで唯一の男性で普段は研究者みたに白衣を羽織つていて、

戦闘スタイルなどは不明で参謀や指揮などをとつていて、

落ち着いた知性的な話し方をするが家族以外は研究対象としてみていて何処か掴めない感じがする。（サイバスターに出るショウみたいな感じ）

普段は自宅や別荘の研究室にこもりデバイスや魔法関連の研究をしている。

シュレリア曰く彼は敵にしてはいけないと語った。

何故か彼が怒るとダークプリズンが何処からともなく響いてくるらしい……

## オリキャラ設定（後書き）

次回はなるべく早く投稿するよつ頑張りますー！

また次回にお会いしましょー！

## 第6話（前書き）

忙しくてなかなか進まない！－

でも頑張ります！－

## 第6話

「ん  
ふわ……朝か  
」

カーテンの隙間から朝日が射している。

「えっと……

時間は……6時か。 そろそろ起きないとね……」

そつまでも体を起しにやうとするが、ムーっと体に何かが当たった。

「? 何か当たつた?  
リリア?」

そつまの中を覗いてみると、元気な黒髪の少女が自分にしがみ

付いてぐっすりと眠っている。

「またか……

リリアも俺ばかりに甘えないとスフィール達にも甘えれば良いの

に……

あれから俺の守護騎士『インフルス』の皆とは家族として一緒に暮らしている。

皆もすっかりここでの暮らしに馴染み楽しそうな毎日を過ごしている。

リリアは特に自分の誕生日を自分と一緒にする程懐いてくれている。

「嬉しこナビ、皆とももつと甘えてくれればいいんだけどね……」

俺はリリアの頭を優しく撫でながら呟く。

リリアは一応、俺とは兄妹のよつな形になつた。

俺には凄く懐いてくれてるのだが、他の家族はともかく他人とは全然関わらうとしない。

リリア曰く「私には悠夜だけが居れば良いの……」だそうだ。

「こればかりは少しずつ慣れて、って貰わないと無理かな……」  
「あ、やつへっこりやつ……」

俺はそのままベッドに転げこなして起きる。朝食を作らなければ朝食を作らねばならないから抜け出すと朝食を作る為にキッチンへ向かった。

「おはようございますー、悠夜くん」

俺がキッチンで朝食の準備をしているとシユレリアが声をかけてきた。

「おはよう。 シュレリア！ 今日は早いね？  
昨日はゲームしなかったの？」

「昨日は予定より早くクリアしたので早く寝れたんですよ。 目標のアイテムも一発でゲットしましたし、あつ！ 手伝いますー！」

セツナはソロアは手を洗い、プロンを着て俺の方にやつて来る。

「ありがとう…

じゃあ味噌汁を任せて良いかな?

その間に玉子焼きを焼いてやうかい」

「任せとけー!

美味しく作っちゃいますよ

シコレニアはセツナの影響かすっかりゲーマーになってしまい普段

は寝るのが遅く起きるのはもつと遅い。

それでも彼女はちゃんと自分で起きて手伝いをしたりとしっかりしている。

俺はそのままながら玉子を少しずつフライパンに流して形を整えていふと……

「ねえ、悠夜くん？」

ショレリアが鍋をお玉で盛り混ぜながら話しかけてくる。

「どうしたの？」

「えっと……えっとですね……」

俺が玉子をひっくり返しながら箸でみるとシユレコトロロをモモガモ、  
としながらえっとを繰り返している。

「どうしたのシユレコトロロ？」

「えっと……

いつも2人並んで料理していると仲の良い新婚さんみたいですねー

／＼＼

ショレコアはいつまでも潤んだ瞳でじらじらを見て来る。

「ショレコア……」

「悠夜くん…………／＼／＼

「ショレコア…………後ろ」

「悠夜くん…………つて後ろ？」

「…………」

そこには無言でショレリアを睨み付けながらソウルスレイヤーを突き付けてくるリリアがいた。

「リ、リリアー？」

何時の間に！？…………それよりもそれをどこしてくれない？！

シユレリアは慌てながらリリアに話しかけているがリリアは無言で首を振る。

「駄目……」

私に黙つて悠夜に近付く女は瀆す……

覚悟は出来たかな…………？」

リリアはやつぱりソウルスレイヤーに魔力を通して魔力刃を形成し始める。

「ちよつー？」

「悠夜くん！！ 助けて下さいー！？ リリアがまた暴走しますよー。？」

涙目になりながらシユレリアは俺に訴えてくる。

(…………この状態のリリアは何故か苦手なんだよね…………)

俺は内心、溜め息を付くとココアに近付いて頭を撫でる。

「ココア……これくじここんちうひよ。  
もう朝ご飯も出来るしさ……」

やつ言つてひたすら頭を優しく撫で続けると……

「ん

わかった…… 悠夜がそう言つなら見逃しあげる…… シュレリア……  
？

次は無いからね……？」

リリアは話を細めながら嬉しそうに返事をするとシュレリアに冷たく言い放つ。シュレリアはひたすら頭を「ククク」と降り続ける。

(今日は簡単に済んで良かった……)

以前、スフィールと喧嘩になつた時は普通にこの家が吹き飛ばしそうになつたのを皆で必死に止めたのを思い出す。

その際、海鳴市で震度3の地震が起きたのだが、関係無い……筈……

その後リリアも手伝ってくれた事もあり朝食の準備も直ぐに終わつた。

「では、頂きます」

「「「「頂きますー！」」」

「いつして皆で食べる」」飯もすっかり馴れたな……

自分もはやて程ではないが複数で食事を取つたり家族で集まる事も殆ど無かつたので今の環境はとても暖かくそれでいて何処かくすぐつたい気持ちになる。

「うまいまです、

マスターが作るお料理はやつぱりサイコーです」

「フンリちゃん？！」

「それは私の玉子焼きい～」

「早い者勝ちなのですよ～」

騒がしく喧嘩するフンリとスフィールを宥めるシユレリア  
だが……

「あんまり喧嘩しちゃ駄目だよ。フンリも落ち着いて食べなよ

「（ひょいぱく、ひょいぱく、ひょいぱく……）」

「あ～～～？」

リリア、それ私の～？ ってか食べるの早いよ～～～。」

「油断大敵……」

悠久の作った物は全部、私の物……」「

宥めていたシユーレリアの皿からリリアが電光石火の速さで玉子焼きを強奪して結局、喧嘩になる……

「ファイルス……」

賑やかだね?」「

「そうですね。主

それを自分とファイルスが微笑みながらそれを眺める。とても暖かい光景だった。

「せとと……」

じゃあそろそろ今後の事について話つか?」「

食事が終われば皆でのんびりとお茶を飲んでる時に俺は話し始める。  
皆も真剣な顔になつて俺の方に顔を向ける。

「そうですねえ」

マスターも含めて今の生活にも馴れましたし、マスターの特訓の方も上手くいっていますし、そろそろ良いかもですねえ」

フェリが言つと、スフィールもそれに続く。

「それで悠夜はどうするの？ 私達は悠夜について行くよ」

「ていうか、スフィールに頭を使わせても無駄……」

「リリアちゃん……  
ストレートだよ……」

リリアはそれに突つ込みシュレリアは苦笑いを浮かべる。  
因みにスフィールは気付いて無いのかのほほんと笑っている……

「あはは……  
取り敢えず先ずは自分が考えていることを話すよ。  
構わないかな?」

と咄に問いかけると咄、笑顔で頷いてくれた。

「海鳴市に来て一週間になるね。今まで情報収集とか訓練に当  
てて解った事として先ずは管理局の在り方だけ……」

そこで俺は一回、話を止めて咄の顔を見回して見る。

そこには失望、悲しみ、怒り、嘆きといった表情が浮かんでいる。  
多分、俺自身も似た表情を浮かべているだろつ……

「正直言つて腐つてる……あれだと自分達の価値観が全て正し

「と妄想してゐるし、全てが腐つてゐる訳じゃないけど自分達がどれだけの哀しみを生み出しているのか気付いてさえいない……」

俺はそつとこの一週間で調べた事を頭に浮かべた。

汚職塗れの上層部、違法な実験に手を貸す者、自分達の勝手な正義により家族を失つて泣き叫ぶ子供達……他にも様々な事が頭によぎつては消える……

俺は怒りで頭に血が上つていぐのを感じて慌てて感情を押し殺す。

（くつ！？ 落ち着け！…今怒つても何も解決なんかしない！  
冷静に考えるんだ！…）

俺は一旦、深呼吸をして呼吸を整えると話し出す。

「とにかく、今の管理局は自分達の勝手な正義によつて哀しみを生み傷ついている人達が数え切れない程いるのが事実……それを何とかしたいと俺は思つてゐる」

「悠夜どうする……？」

潰す……？」

リリアの問いに俺は静かに首を振る……

「それは駄目だよ……」

それだと今の管理局がやつてる事と一緒になる。

それにその選択をするとまた新たに傷つく人が出でてくる……

俺達は俺達のやり方で管理局を変えていきたい

「そうだね！」

私達には私達のやり方があるんだよ……！」

「スフィール……」

意味分かつてないでしょ……？」

元気に答えるスフィールに冷たい視線を送るリリア……

「リリアちゃん酷いよお～

私はそんなに馬鹿じゃないんだよー!?.」

「　　」

スフィールがそう言つと皆は一斉に冷たい視線を彼女に送つた  
俺は……ノーコメントで……

「みんな酷いよ！？」

私は馬鹿じゃないもん!! 悠夜は私の味方だよね!?.

「…………あ、ああ！」

スフィールは馬鹿じゃないよー  
ちょっと天然なだけだよー!..

「ほんとー?」

やつたあ～ やつぱり悠夜は私の味方だね

「

良いのか……スフィールよ?

皆の視線が哀れみの物に変わってるのに気付いてないし……

「コホン!

では主はどう動きますか? 正直いって内部から変えていくのはとても困難ですよ?

私達には後ろ楯もありませんし……」

ファイルスが仕切り直しに訊いてくる。

「そうだね。確かに俺達には後ろ楯が無い……普通に管理局に入局しただけじゃ何時になるか解らない……」

「どうしますかマスター? 早く何とかしないと苦しむ人が増えていきますよ~?」

フヨリが哀しそうな表情を浮かべながら尋ねてくる。

「うん。だから後ろ楯を作る事と平行してやつてみたい事があるんだ」

「？ 悠夜…… やつてみたい事つて？」

「まだ内緒。 ただ1つ言えるのは俺にはそれしかないからね……  
まあ、今は管理局に入局する事と後ろ楯を作る事を目標にして行こうか？」

俺の一言で締めくくつ第一回家族会議が終了した。

「わてと……

少し散歩でも行って来ようつかな……

今日の訓練は昼からだし天気も良いし、少しのんびりしようかな?

本当なら朝から訓練したりフィルスと一緒に俺のデバイスを作成したりと何かと忙しいのだが、先日フェリにたまには休んで下さいと訴えられた。

最初は断わるうとしたのだがフェリは涙目で睨みスフィールやシユレリアにも笑顔で却下され、リリアに至っては縄を片手に怪しい笑みを浮かべていて俺は冷や汗をかきながら頷くしかなかった。

「マスター どうぞお出掛けですかあ？」

「ん？ 特に決めてないよ？ 少しの遊びりと歩きたいだけだし

「そなんですか？

フェリも一緒に行つても良いですか？」

「構わないけど……」

フヨリって今日の掃除当番じゃなかつた?」

俺がフヨリに尋ねるとフヨリはシマツタつて表情を浮かべて「忘れてました……」としょんぼりしてしまつた。

その後、皆も付いて行く! と騒ぎになり結局、じゃんけんでスフィールが勝ち他の皆が悔しそうな顔を浮かべてゐなか上機嫌なスフィールと散歩に出掛けた事になつた。

「ん~

良い天氣だね~ 風も気持ち良いしお散歩地獄つてのはこのことだね~

「……スフィール、お散歩田和だから……」

と2人で他愛もない雑談をしながらのんびりと海鳴の町並みを歩いて行く。

途中で俺が初めてこの世界に来た公園が見えた。

「あつ、スフィール、ちょっとそこの公園に寄つても良いかな？」

「良いいよ～」

スフィールに了解を取ると俺達は公園の方に足を向けた。

「パパとママの馬鹿！！」

私はそう言つと屋敷を飛び出した。

今日は久し振りにパパとママの仕事がお休みで今日は皆でお買い物に行こうって約束してたのに……

私は感情を剥き出しにして怒りを現しながら走ってる。

自分でも何処に向かっているかなんて考えもせずにただがむし  
やうに走って感情を爆発させる。

だけど何時までそれが続く訳もなく、息が切れて体もふらふら

して来ている。

幸い、すぐ近くに公園があつたので少し休もうと公園のベンチに座る。

ベンチに座ると体の力が抜けてぐつたりと体を休める。次第に息も落ち着きだんだんと頭に血が上っていたのも落ち着いてくる。

「パパ……ママ……」

冷静になつてみると先程の自分の言葉が胸に刺さつてへる。

「パパとママに酷い事を言ひやつた……

普段はとても穏やかで優しい両親の顔を思い浮かべる。

何時も私のわがままを困ったようでそれでいてどこか嬉しそうな顔

をして聞いてくれるパパとママだけ先程はとても哀しそうな顔をしていました。

「…………ひっく、パパ、ママ…………」

もしかして嫌われちゃったかな…………

わたし、本当はパパもママも大好きなの…………

だんだんと不安になつてきて私の眼から涙が溢れてくる。

「ひ…………ひ…………ひ…………ひく…………ぐす」

ついに私の我慢も限界になり泣き出しちゃう。

「…………め…………めあなた……だからもうここにならな……で

…………」

そう泣いてると独りでいるのが不安になり更に哀しみが増してきた。

「パパ…………ママ…………」

わたしが何であんなことを言ってしまったんだろうか。  
パパもママもこいつも忙しくしててくれてるのに優しくしてくらべるの……

後悔と不安と悲しみで胸が張り切れなくなっている……

~~~~~

何処からか美しい歌声が響いて来る。

「ひっく…………ぐすつ…………？ 綺麗な声…………」

わたしはその綺麗な歌声にすっかり泣いていた事を忘れてふらふらと立ち上がりと歌声が聞こえる方に向かって行った。

「どうだい？」

「うちから聞こえるんだけど……」

よく耳を傾けてみると高台の方から聞こえてくる。

わたしは走り出して向かった。

「つ……？」

そこには美しい銀髪を風にたなびかせてまるで祈るかのよう目を閉じて歌うとても形容しがたい美しいものが存在した。

（悠夜Side）

「綺麗な公園だね  
海が見えるし広いし、風が気持ちいいや」

スフィールは上機嫌でぐるぐる回りながら話しかけてくる。

「そうだね。  
何だからでずっと訓練とかデバイス作りに没頭してたからこんなに気が休まるのは久しぶりに来て初めてかな……」

「そうだよ」

悠夜つて色々やり過ぎなんだよ  
訓練にデバイス作成、更に調べ物とかアイテムの研究とか無理しそうー」

「うーん、反省するよ……でも色々と調べてみてさ、何だか

自分が何とかしたいって気持ちが強くなっちゃってね……

俺がそう言つとスフィールはクスクスと笑い出し

「もう、悠夜はあ～」

自分でも言つてたじやない人間は完璧じゃない。物事を善と悪で区切るのは無意味で人一人で出来る事は余りにも少ないって

「あはは…… そうだったね…… 意気込み過ぎたかな？」

尋ねるとスフィールは偉そつにウンウンと頷いてる。

……何だか構いたくなる顔だね……

「それにしてもさ？」

俺が改めて問い合わせるとスフィールは首を傾げる。

「スフィールが俺の言つてた事を憶えていたのには驚いたよ……？」

真剣な表情を俺は浮かべてスフィールをからかってみると……

「ひどいよ～！？」

私はそんなに馬鹿じやないもん！――

途端に頬を膨らませて反論してくる。

…………しかし

「そんなんにっ！」

聞き返すと顔を真赤にして

「む～！？ 悠夜の意地悪う～」

すっかり拗ねてしまった（笑）

「ごめん」「めん。ちょっととからかい過ぎたよ。  
お詫びに何か言う事を聞くから許してよ」

そういうとスフィールはすっかりと機嫌を直した。

「本当ーー？」

「じゃあねえー うーんと…………そうだーー！ 歌が聴きたいーー！」

「歌？」

「うん 歌 最近は詩魔法ばっかりで普通の歌は聴いてない

し……

悠夜の歌が聴きたい！」

「歌か……

そつこえぱすつと歌つてないな……

うん。良いね！」

最近はなしへしへしへしへと歌つてない事を思つて出して覚える。

「えへへ 決まりだね じゃああの高台の新元にじみー。」

そつぱつと俺の手を掴み走りだす。

「そんなこもくなくとも良こんじやー！？」

「だつて早く悠夜の歌が聴きたいんだもーん」

と聞く耳を持たなかつた……

「全く…… 流石に全力疾走して直ぐに歌える訳ないでしょ……」

「…」

「あはは……」「めんね……」

流石にちよつと走った位で息を切らす程、弱ではないがもうちよつと落ち着かせて欲しい。

「ふー わたと……  
じゃあ歌つよっ!」

もう歌つとスフィールはうるーと冗談よく心える。

「聴いて下さい。私の想いを……」

何時ものように呟くと俺は歌いだす。  
自分の想いを……

「 静かな　　この夜に

貴方を待つているの

あれから　　少しだけ時間が過ぎて

思い出が優しくなったね

星の～　降る場所で～　貴方が笑っていることを

いつも願つてた　　いま孤独でも～

また逢えるよね？」

歌い終わると周りから凄い拍手が贈られてくる。

「え！？ 何だか人が沢山居る……」

何時の間にかスフィールだけでなく沢山の人が集まって涙を浮かべながら拍手をしている。

「何時の間に……」

「悠夜が歌い始めたら何時の間にか集まって来たんだよ  
やっぱり悠夜の歌は良いよね~ 優しくて暖かくてどこか寂しい  
感じがしてさ」

「そう？ ありがとう 久し振りに歌つたから気持ち良いよ！  
……………ん？ あの子は…………」

ふと見ると直ぐ傍に同じ年位の金髪の女の子がもじもじしていた。

「大丈夫？　どうかしたのかな？」

尋ねてみどりの子はこいつらを見上げ声つた。

「あ、あ、あんた！？　私の婚約者にしてあげるわよ！？」

「…………は？」

「え～！？」

突然の彼女の宣言に俺とスフィールは驚きの声を上げるのだつた。

## 第6話（後書き）

え～ 因みに作者は某魔王を嫌つてゐるわけじゃありませんよ（汗）

何といふか……

もつと引っ張れ！！と電波が！！

? 「ふざけるななの！？」 普通、あそこで公園つて私なのーー！」

ではまた次回へ

? 「無視しないでーー！」

そういうネタははやてちやんの役目なのーー？」

…………カラバ

## 第7話（前書き）

お待たせいたしました！！

すいません……

色々と忙しくてそ、う仕事とかゲームとがゲームとかゲームとか……

すんませんしつたー！！

S.i.d.e~

そこには美しい少女が……

いや着ている服は男物だし少年かな?  
ともかく私と同い年位の子が目を閉じて気持ちよさそうに歌つてい

る。

(なんて綺麗な声なんだろ、……)

その歌声はとても美しく、まるで祈るかのように歌う姿はまさに神々しくどこか消えてしまいそうな儂なさを感じた。

私はさつきまで悲しかったのも忘れてその歌に吸い込まれてい  
た。

そして歌い終わるとその少年は静かに目を開けると周りを見回すと少し驚いた表情を見せたがすぐに微笑みペコリと頭を下げた。

何時の間にか私の他にも沢山の人が集まり笑顔で拍手をする。

(すごい……こんなにたくさんの人人がいつ来たんだろ？　それみんな笑ってる……あの子凄いよー)

私は気付くと彼のすぐ傍まで近づいていた。

彼は私に気付くと一瞬、びっくりした表情を見せたがすぐに微笑み私に優しく声をかけてくれた。

その表情と優しい声を聞いた瞬間に私の頭は一瞬で血が上り何も考えられなくなり私は咄嗟に話しかけた。

「あ、あ、あんた！？　私の婚約者にしてあげるわよー・？」

| Side END |

何？この展開は……

俺の目の前には顔をこれ以上ないくらいに真っ赤にした金髪の少女が俯いている。

良く知らないけど興奮してて言いたい事が言えないのかな？

……ほら、その子もだんだんと落ち着いて来たのか顔を真っ青にしてあわあわしている。

(とにかく落ち着かせないとね)

俺はやうやくとの少女の頭をゆっくりと撫でながら話し掛けた。

「大丈夫だよ……

だからゆっくりと深呼吸してみよつか？」

そつぱりと少女はびっくりしたように俺の顔を見ると顔をまた真っ赤になると「クククと頷いて深呼吸をし始める。

「もう大丈夫?」

俺が問い合わせると少女はまだ赤みの残る顔をしながらも答えてくれた。

「う、うん。大丈夫……迷惑かけたわね……」

やつぱり恥ずかしかったのか少女はどこかぶつせりぼつつな口調だ。

「ちょっとびっくりしたけど、気にしないで良いよ？ 僕も君みたいな可愛い子がお嫁さんなら嬉しいしね？」

俺がそう叫ぶと少女はボンと音を立てて顔を真っ赤にする。

(からかにすぎたかな……)

そう思つてると少女は勢い良く顔を上げると潤んだ瞳でこちらを見てくれる。

(やつ過ぎた……  
スフィールは物凄い目つきでこちらを睨んでるし……空気を変えな  
いと……)

「あはは……恥ずかしい思いをさせて『めんね』

所でお名前を教えてくれるかな?

僕は月神悠夜っていうんだ

「あつー あたしはアリサ! アリサ・バーニングスっていうの  
よーーー」

少女……いやアリサは慌てた感じだつたが答えてくれた。

「アリサちゃんか……

良い名前だね！ 改めて直しくね」

「う、うん／＼／＼  
よ、よろしくしてあげてもいいわよー…？」

面白い子だね、アリサちゃんは。

そう思つてるとスフィールも直[口]紹介をしていた。

「私は月神スフィールだよー 悠夜の姉でーす  
宣しくねアリサ・バーモ ドカレーちゃん」

「ちがうわよー？  
わたしはアリサ・バニングスです！  
カレーじゃないわよー！」

「違つた～？」

えーとル ズ・なんぢや いらぢやんだったね」

「違うー！」

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！  
？」

「そんなに長いの覚えられないとー」

「ふざけんじやないわよ！？ この馬鹿犬ー！…………ってな  
にやらせるのよ！？ 私はア・リ・サ・バ・ニ・ン・グ・スつて言  
つてるでしょ！？」

「アリサ・バーニングスパンチだね？ 覚えたよーー！」

「ちつがああう！？」

「あんたケンカ売つてるのーーー？」

「え？ 何か買つてくれるの！？ ありがとう～」

「何時まで続くんだ？」

「これ……？」

『スフィールはアリサマスターとなつた！』

あの後、30分は続いた漫才を俺は何とか終わらせ改めてお話しをした。

「悠夜のお姉さんって凄いわね……  
色々な意味で……」

「あはは……」

悪氣はないから気にしないでくれると助かるよ……」

「ええ……まともに相手をするのもつかれたわ……」

「なになにー?」

「何の話しじ?」

「「何でもない……」」

スフィールの発言に俺とアリサは疲れた返事を返す……

「ふーん……  
そういうばあアリちゃんは悠夜に何か用だったの? ずっとこいつを見たしさあ~」

スフィールはふと思い出したのかアリサちゃんに訊いてきた。  
「ういえ、漫才で忘れてたけどアリサちゃんは何か用がある感じ  
だった……」

「アリじやない！！　つてえつ！？　え、えーと……ゆつ悠夜の歌声が綺麗だなあ～　って思つて悠夜を見てたらね？　なつ何だか胸がどきどきしてもつと近くで見たいなあ……て思つてたらこいつの間にがあんな近くに／＼／＼／＼」

成る程……そんなん俺の歌を氣に入つてくれたのなら嬉しいな  
久し振りに氣持ち良くなつた気に入つたから……

「ありがとねアリサちゃん。　僕の歌をそんなんに氣に入つてくれて嬉しいよ」

「へ？　あつそつなの！　わたしこんなに綺麗な歌声は初めて聴いたのよ！」

べつ別に悠夜の事が気になつた訳じゃないからね！？」

えつと……これつて確かツンデレだつけ？  
何か微笑ましいね。

「そつか……僕はアリサちゃんと友達になりたかつたんだけど、

それなら仕方ないよね……

スフィール……帰ろうか……

俺がそうスフィールに話し掛け、帰るひとまるとアリサちゃんは慌てて引き止めて来た。

「ちよつ！ちよつと！… まつま、待ちなさいよ！… べつ別にわ、わたしはそんなつもりじゃ！…」

「スフィール……

今日のお皿は何を食べようつか……？」

「そうだね～  
ラーメンが良い！～

「オッケー！

じゃあスーパーで買い物して行こう

そのまま公園から立ちはだかっていたアリサちゃんが回り込んで来て逃げられなかつた……

「ま、待ちなさいって叫んでしょー?」

かつてに帰らなこでーー。」

「じゃあ素直にならつか? 言ったこと事はやると言わないとね?」

「つーーー? .....え、えーと.....や、その.....わたしも終夜とお友達になりたい.....」

アリサちゃんは顔をこれまでかとこいつらに真っ赤にしながらも素直に答えてくれた。

語尾が少しづつ小さくなつてこつたけど、それはじ愛敬だ。

「うんー、直しへねアリサちゃんー。」

そう言いながら俺は手を差し出した。

アリサちゃんは一瞬キヨトンとした表情を見せたが俺の意図が直ぐに分かったのか俺の手を握つて笑顔で返してくれた。

「へえ～ 引っ越して来たばかりなんだ？」

悠夜兄さまは？」

「うん。 そなんだよね。だから友達もまだ少なくて……」

あれからアリサちゃんと簡単な自己紹介など交わしていたら俺が1つ年上と分かりアリサちゃんは俺の事を兄さまと呼び方を変えてきた。

最初は柄でもないからと呼び捨てで構わないと言つたんだけどアリサちゃんは変える気はないみたいだ……

(正直言つて恥ずかしいんだけどな……)

まあ、可愛い妹が出来たと思つて諦めるか……

改めてアリサちゃんを見つめて見ると少し頬を赤らめているが  
「…………ナゾ、少しきこひかない気がする…………

何だか瞳の奥に悲しみを感じて俺は優しく微笑みながらアリサちゃんの頭を優しく撫でながら「何か悲しいことがあったの?」と尋ねる。

するとビクッと体を震わせて笑顔が崩れ落ち、泣きそつな表情を浮かべながらポツポツと少しずつ話してくれた。

時々、詰まりながらだけどアリサちゃんは全てを話した。

「そっか……

それでアリサちゃんはどうしたいの?」

そう問い合わせると「わかんないわよ……」と呟いた。

「じゃあ、アリサちゃんはパパとママは嫌い？」

そう尋ね返すとアリサちゃんは怒ったような表情を浮かべながら

「そんなことは絶対にないわ！！

わたしはパパもママも大好きなんだからーーー！」

と大きな声で答えてくれた。

「だったら簡単だよ？

傷つけたら謝る。悪いと思つたら反省する。

そして次に笑う。これで皆笑顔になるよ

「で、でも……わたし……

「怖い？ もしかしたら嫌われたかもって思つてる……？」

「へ、うん……」

そつまつとアリサちゃんは体をふるふると震わせる。

「大丈夫。アリサちゃんのパパもママもアリサちゃんを嫌う事は絶対にないよ……」

「な、なんで……？ ビ�して分かるの……？」

「だつて、アリサちゃんが大好きつて自信を持つて言えるんだよ？」

ならパパとママも絶対にアリサちゃんを嫌うなんてあり得ないよ？」

そつまつとアリサちゃんはハッとした表情を浮かべる。  
だけど、まだ不安そうだね……

なら……

「アリサひさんまだ不安?」

そう尋ねると「クンと頷く。

「ならアリサちゃんに勇気をあげる。  
アリサちゃんが笑ってパパとママに会えるように僕がアリサちゃん  
に勇気をあげるみ……」

そつまつと俺は静かに目を開じ心を静める。

わあ歌おつ……

アリサちゃんに勇気を……

笑顔を取り戻す為に……

「あなたに届けたい……わたしの想いを……」

そして俺は歌い始める……

♪ Side OUT ♪

♪アリサ Side♪

悠夜兄さまが静かに目を閉じると風が一瞬止まりポツリと何かを  
呟き歌い始めた。

(すい)こ……やつきも歌っていたけど何かちがう……)

何がとはハツキリとは分からぬがとても美しく綺麗な歌声で  
悠夜兄さまの心が伝わってくるかのようであるで応援されているよ  
うな気分でとても暖かい気持ちが芽生えてくる。

(何だら、この気持ち？ 憂くあつたかくて何か気持ち良い  
……)

こんな気分は初めてだ……それはとても暖かくて心地よい……  
何だか不安だと思ってた気持ちがどこかに吹き飛んで行く気がする  
……

(ちいこよ……悠夜兄さま……天使みたいだよ……)

わたしはその心地よさにどんどんと目が重くなつて意識が遠く  
なつていくを感じながら少しでも田に焼き付けようと悠夜兄さま  
の姿を心に刻み込みながら眠りについた。

仕事に行つた筈のパパの背中に背負われてパパの隣にはママまで

「ん……  
あれ? ここは……?」

わたしが田を覚ますと体が浮遊感を感じる。

「あれ? わたし……  
えつ! ?」

頭を軽く振つて眠氣を覚まして改めて自分の状態を確認して  
みて驚く……

緒だったのだから……

「おひー 起きたかアリサ」

「おはよー。アリサ……よく起つたわよ。」

パパとママが優しく話しかけてくる。

「パパ……ママ……

その……

家を飛び出した時の経緯もあり向となぐ氣まずい……

「ふふふ それこしてもアリサはこいつの間にあんなにカッコ  
良いボーイフレンドが出来たのかじり?  
ねえ? パパ?」

「ああ！ それにずいぶんと落ち着いてしつかりとしていて将来が楽しみだ！」

「なつー？ ななな／＼／＼ぱつパパもママからかわいでよ／＼／＼」

私は今までの氣まずい気持ちをすっかりと忘れて慌てて反論する。

「べつ、別に悠夜お兄さまとはそんな関係じやないわー？」

「あらあら 悠夜お兄さまですって パパ今日はお祝いね」

「それは良い！」

アリサに恋人が出来た記念日だ  
みんなで食事に行くか！

「それはナイスよパパ じゃあ行きましょうか？」

「……恋人お……ち、違う……違つわよ……悠夜お兄さんは別に……ってパパとママは何でここに居るの……？ 仕事は……？」

恥ずかしいけど、今は疑問に答えてもらひのが先だ今日は仕事で私を探してゐる時間は無いはず……

「その話しか……

実はあの後すぐにアリサを追い掛けたんだよ

「え！？」

「そうなの！？ 気付かなかつた……」

「それはそうだろ？……なんたつて私はジャパーズS・A・S・K・Eでファイナルまで出たんだぞ？」

「パパ」冗談はおやめなさいな……

ママがパパを睨み付けて黙らせる。

「実はね、アリサを公園までは追い付けたんだけど見失つてね  
…………  
どうしようかと思つてたら綺麗な歌声が聞こえて来たから行つてみ  
たらアリサが気持ち良さそうに寝ていたわよ?」

それを聞いて私は顔が真っ赤になつた。

何故なら悠夜お兄さまに私の寝顔を見られてしまつたから……  
…………  
「うう……  
悠夜お兄さまに寝顔を見られちゃた……  
とこりで悠夜お兄さまは?」

よく見ると辺りはもう日が暮れてきていて綺麗な夕日が見えて  
いるし、お兄さまの姿も見えない。

「ふふふ

お兄さま……ね

あなたのお兄さまなら帰

つたわよ?

こっちに引っ越して来たばかりだからまだ電話とかも用意して無い  
つて言ってたわ

「そりなんだ……」

私は残念な気持ちを隠せずにため息をつく。

「大丈夫さー

変わりと書いては何だけどお互いの住所は教えあつたから遊びに行  
けるよー！」

パパは笑顔で言うと私の頭を撫でてくれる。

(そつか……ならまた逢えるわよね? また歌を聴かせて

くれるかな?

それに……えへへーーー)

パパの言葉に私は嬉しくて一いやーーーとしてしまった……

……うつ……  
パパとママが何だか微笑ましいものを見てるような視線を送りながら笑ってる……

「べつ別に嬉しいんじゃないんだからねー!?

わ、わたしはただパパとママがい、一緒に嬉しいだけなんだから!?

私の言い分にパパとママが微笑みから爆笑に変わってしまった

……

後から思つたけど流れの言い訳はないだろうと曰くんだのは  
内緒よ……

ともかく悠夜お兄さまのお蔭で何だかとても楽しい気持ちにな  
つて清々しい気分になつてるよ……

今なり聞えるかな……

「パパママ

おのな?

アリサ Side End

悠夜 Sides

今僕はとんでも無い危機に立たされている  
もしかしたら

いや、絶対に僕は此処で死ぬかもしれない

何故な?

「…………」

公園から帰つて来た僕等を待つていたのは無言で僕を睨みなが  
ら包一（のような物）を突き付けてくるリリアだった……

「あ、あのを……

り、リリア……？ 何でそんなものを向けてるのかな……？」

僕が問いかけるとリリアはしづらへ無言で睨み付けていたがや  
がて……

「それは悠夜が良く分かってること埋つよ…………？」

リリアはそう言いながら僕に近づいて来る……

「…………？」

僕は慌てて逃げようとしたが体が何故か動かない……

「くつ！？」

スフィール！ スフィールからも何とかいつ……

僕は隣に居た筈のスフィールに助けを求めたがそこにスフィールは居なかつた……

(あ、アイツさつさと逃げやがって！？ い、いやそれよりもリリアを何とかしないと！？)

「あ、あのさ……

頼むから落ち着いてくれないかな……？

お、俺……いや僕はその空気……雰囲気が苦手なんだよ……」

ふと脳裏に自分が死ぬ瞬間の光景を思い出す……

あれ……？ 何だか蕁麻疹が……

「駄目……」

悠夜は分かつてないよ……わたしがどんな気持ちでいたのか……  
ねえ……それで悠夜から女の臭いがするんだけど……だれ！？

？」

り、リリアが怖い……

いつもは物静かなリリアが怒鳴るだけで何でこんなに体が震えるんだ……

「あ、あのさ……  
身に覚えがないんだけど……」

「そう……

でも……おかしいな？

悠夜の体からは汚らしい女の臭いがするんだけどなっ・どつかのツンデレふつたお嬢様みたいな……ね？」

「つ……？」

もしかしてアリサちゃんのことか……？  
でも特に何かあった訳ではないんだけど……

「もしかしてアリサちゃんかな……」

今日、公園で知り合って友達になつたんだけど……」

俺はなるべくリリアに刺激を与えるように簡潔に答えた。

「ふーん

アリサ……ね……なにかしたのかな……？」

あれ？

リリアの雰囲気がさつきより冷たくなつてゐる……？

「いや……

何もなかつたよ？ ただ、僕の歌を聞いてくれて、仲良くなつただけだし……」

「……

「悠夜の歌……！？」

「……そうなんだ……」

「り、リリア！？」

「た、頼むから落ち着いて！？」 それ危ないから降ろして……！」

リリアの纏つ空気がまるで音が消えたかのように静かになり、リリアが包丁（のような物）を構えて近づいて来る。

「悠夜にはお仕置きが必要だね……？」  
「……ちよっぴり痛いけど我慢してね……」

「リリア……

洒落にならないから辞めて欲しいんだけどな……」

「大丈夫……冗談じゃないよ？」

それに傷ならわたし가直ぐに治してあげるよ?  
だから悠夜が反省するまで

おはなししよう?」

♪ 悠夜 Side End ♪

♪ ? Side ♪

「ふふふ

よつやく見付けたわよー。  
彼なりきっと

「

N  
e  
x  
t  
  
S  
T  
O  
R  
Y

## 第7話（後書き）

JAZZラジオ

悠「つてな訳でJAZZ始めるよ～」

すずか「どうも初めまして！ JAZZ代表の月村すずかです  
因みに本編に出てる私とは別人だから間違えないでね？」

悠夜・フエリ

「「ちよっと待て（です）……」「

悠「何だよ～？」

番組の邪魔はいかんよ～？」

悠夜「番組つてなんだ！？それにこいつて言われてもせつぱり分  
からないよ～？」

悠「こだからシロートは……」

フヨリ「関係ないですよーー。それより説明して下せーー。」

悠「メンディイナー

JUNIORはラジオ番組ですー以上ー」

悠夜「説明になつてないよーー。」

すずか「えーとね……JUNIORは悠くんがJUNIORで小説を書き始める前から色んな所で番組式の小説?をやつしてたのもやつてみようつてなつたんだよ?」

フヨリ「JUNIORは何ですかあー?」

悠「よくぞ聞いてくれたーー。自重ネットすかって略である恩人が付けてくれたんだよー。」

すずか「わたしは納得してないよーー。」

悠「確かにある拍手ですすかの出番が無いので悠さん向とかして下さって無茶振りがきつかけだったねー。」

悠夜「あはは……」

フユリ「すずかちゃんはアブキャラードから～」

すずか「フユリちゃん……握り潰すよ」

フユリ「…?す、すいませんでした…?」

悠「久し振りに見た…

黒すずか……」

すずか「何か言つたかな悠くん…?」

悠「何でもありません…!」

悠夜「もしかして本編のすずかちゃんもいつなるの…?」

悠 「…………

「…………

悠夜 「何で無言ー? 僕が黒いキャラが苦手なの知ってるの?」

?

すずか 「わたしは黒くもないし、ヤンデレでも無くて

「…………」「…………」

すずか 「文句ある?」

「…………」「…………」

悠 「活動報告でもやつてみたんだけど、いつの方方が良いかな~って始めて見て様子を見る事にしたよ。」

「

悠夜 「えっと……それで何をするの?」

悠「何でも 質問でも対談でも無茶ぶりでも何でもいいから…」

悠夜「じゃあ…」

早速、質問があるんだけど…」

すずか「悠夜くんが最初だね！ それでどうしたの？」

悠夜「俺…」

死んでないよね…？」

悠「…………では時間になりましたのでまた次回…」

すずか「要望やアドバイスも募集してるから宜しくね？」

悠夜「ちよつ…？」

悠・すずか

「解散です…」

悠夜「もしかして死んでる！？」「ねえ！？」

## 第8話（前書き）

まわか仕上げるのにはじめで掛かるべき……

因みに今回まし時間を費さずにこらのうが一 念は意図してだ。

KHの期間はまたそのうちに書かもすー。

～？Side～

「やあー、君から連絡とは珍しいね？ 何かあつたのかい？」

真っ暗な空間の中に映像が浮かび男の声が響く。  
映像に映しだされているのは”sound only”のみだ。

「ああ……久し振りだね？ といひで嘘は元気かな？」

それに応える声も男……いや女性のよつこも聞こえるし少年や少女にも聞こえる中性的な声だ。

「勿論だよー、皆、君に逢いたがってる。それに僕もねー」

男の落ち着いた声が少年のよつと甲高くなる。

「そつか……

じやあまた今度会いにいく時には何か作って行くよー。」

「本当かい!? それは嬉しいね! それならアップルパイにしてくれないかい? 君が作るパイは最高だからねー!」

「分かったよ! 必ずお土産に作って行くから。  
楽しみにしていてね」

それに答える少年? も年相応のものに戻っている。

「ねえ…… そろそろ本題に入らない? 私もそんなに暇じゃないんだけど……」

暗闇の室内にもう一つの映像が浮かび上がる。

そちらも”SOUND Only”とだけが浮かび上がっているが  
その声から落ち着いた女性だと判断出来る。

「おや？ 何時の間に来てたんですか？」驚いて紅茶を溢してしまったよ

「ふざけないでくれるかしら？」私は貴方みたいに冗談は好きじゃないのよ……

「またまたあ～ 僕は知ってるよ～ 彼と会つ時は何時もと違つてしまふで恋する」女のようだつて

「…………死にたいよつね…………？」

その言葉に部屋の空気が重くなる。

通信での会話なのにここまで殺氣を送るのは止めて欲しい……  
少年は溜め息をつくとその喧嘩？を仲裁する。

「はあ…………2人とも落ち着いてくれるかな？」

それとさ…………余り彼女をからかわないで欲しいんだけど……

話しが進まないよ……

「ハハハ！『ごめんごめん！』久し振りに君たちと話すから興奮してしまってね！！」

〔毎回これは勘弁して欲しいわ……〕

「回感だよ……」

男の何時もの冗談に女性と少年は深く溜め息をついた。

「成る程ね……やっぱり上層部全体が似たようなものか……判つてはいたし期待もしてなかつたけど応えるね……」

「期待するだけ無駄よ……私達だって、彼が居なかつたら今頃は消されてたわよ？」

」

「違いない……最も簡単にやられるつもりはないけどね。でもろくな最後にならないだらうけどね……」

通信越しにだが静かな怒りと苦悩を滲ませながら2人は語る。

「でも……そんなんくでもない世界だけど僕等は君と出会えた……そして何よりも僕をただの人として扱ってくれた！」

男の声に力がこもり熱を帯びはじめる。

それに同調するかの様に女性の声にも力がこもり始める。

「本当ね……貴方と出会って居なければ私はとんでもない間違  
いを起こしていたわ……本当に感謝するわ……」

女性も感慨無量と言つた感じで少年に礼を言つ。

「あんまり褒めないでよ……僕達が動けたのも本当に偶然な  
んだよ？」

もう少し早く対処出来ていたら良かつたんだけどね」

それに対しても少年は少し後悔を滲ませつつ応える。

「そんな事、言わないでくれよ。僕と娘達を助けてくれたのは  
事実なんだ。」

それとも君は全てを救うヒーローにでもなる気かい？」

青年の口調に少し嫌悪感が見え始める。

「まさか……

そんな事思う訳ないじゃないか！　君だつて僕の気持ちは知つてる  
だろ？？」

少年の口調に力がこもる。

〔はははー！めんよ？少し君の困った顔が見たくてねー！〕

〔はあ……貴方、悪趣味よ？〕

「すまない。君の困った顔はとても興味深いからね。　もう言  
わないよ？」

「…………はあ。

じやあ話しが続けるよ？」

そう言って3人は話し合いを再開するのだった。

「じゃあまた連絡するよ」

「ええ。待ってるわよ？それと近々、あの娘達がそっちに行くから宜しくね？」

「そういうえばそつだつたね……分かったよ。  
2人に楽しみにしてるって言つといてね？」

女性の言葉に少年は嬉しそうに微笑みながら答える。

「判つたわ。喜ぶわよ？あの娘達は貴方にぞつこんだしね  
？」

女性の口調が柔くなり嬉しそうで少ししからかうような物に  
変わる。

〔おやおや……何の話しだい？ 私にも教えてくれよ〕

すると今まで黙つて聞いていた男性が話に入つてくる。

〔私の娘が彼を手伝いに行くのよ。それに彼に任せているデバイスのチェックもしたいしね？〕

〔おやおや。 デバイスの報告なら通信で問題ないじゃないか  
い？〕

〔貴方……分かつてん癖に趣味が悪いわよ？ それに母親なら  
子供の幸せが第一なんだから〕

青年のからかう物言いに女性は呆れた口調で反論する。

「何。貴女に先を越されたから少しかつただけさー  
それにそれなら僕も黙つてはいられないね！  
僕も近いうちに僕の娘をそっちに送るよ！  
僕もデバイスのデータが欲しいしね～」

青年も女性に対抗するよう言いつぶへる。

「あ

分かったよ。纏めて面倒みるよ……

それから、僕の家族も宜しくね？」

それに対しても少年は疲れたように返事を返す。

女性と青年は『勿論ー』と綺麗に返事をする。

「じゃあそろそろ通信を切るよ。休み時間も終わるからね。  
じゃあまたね？……………ジエイルにブレシアさん

そう言つと。暗闇に包まれた室内に照明が付き今まで暗闇に隠れていた少年の顔がはっきりと見えるようになる。  
照明の光りに照らされ美しく光る銀髪に中性的な顔。

月神悠夜その人だつた。

↙? Side End ↘

「ふう……あの2人には適わないな……」

ジエイルとプレシアさんとの定時連絡を終えてひとまずホッと息をつく。

「しかし、まあ……

管理局が人手不足で能力の高い人材を確保したがつてるのは知つてはいたけど……」

そう呟くと自分にあてがわれた部屋をグルリと見回す。

落ち着いた色調で統一され部屋の広さも自分のデスクに補佐のデスクが2つ並び最新の機材も揃っているのにまだ余裕がある。

「こっちには労働基準法とか関係ないのかな？」

少なくともこちらの地球にはあるみたいだけど……」

正直いってこの環境は異常だろう……

自分としては現在進行中でお子様であるから動き易いのは助かるのだが……

自分は元々、二度目の人生という有り得ない状況で幸い自分が元々持つている価値観や倫理観がしっかりと構築……いや、学んで来た。しかし、管理局で働いている自分よりも少し年上な少年、少女達は必要最低限の教育環境しか与えられておらず魔法などの訓練や管理局が定めた価値観や法を教え込んでいる。

（世の中にはちゃんと学べない人もいるし……  
完全に間違ってるとは言わないけどこの環境だと偏った価値観しか  
持てないんじゃないかな……）

管理局で教えられている事は端から見ると非常に合理的かつ機能的  
で公平に見えるだろう。

だけど、非常に良く出来た人間育成プログラムなんだがそこに  
は感情が見えてこない。

これは自分の考え方だが人間とは失敗を重ねて成長する生物だ。

人間の感情や倫理、はたまたは常識などは直接、人とふれあい、失  
敗や成功を重ねて自分なりに構築していき、特に小さい子供は学校  
へ行き学び、友達と遊ぶ事が重要だと思う。

確かに、ここにも教育機関はある……

だが自分には嘘、同じ表情を浮かべているような気がする。

それが間違っているとか正しいとか思わないけど何処淋しさ感じる。

ふと、自分が管理局に行く事を決めた口を思い出す。

「ええ～！？ 管理局に入局するの～？」

自分が管理局に行くと既に伝えた事の第一声がスフィールの不満そ  
うなコメントだった。

「う、うん。 そのつもりだけど不味いかな……？」

それに対して悠夜は何処か気まずそうな表情を浮かべながら答える。

「不満も不満！！大不満だよー！？」

それに対してスフィールは完全に『機嫌斜めのようだ……』

「…………ねえ、悠夜？」

あれだけ調べて管理局が大変な組織だつて判つてるのに何で？

リリアが不思議そうな表情を浮かべながら尋ねる。

「うん。 確かに僕もそう思ったよ

「…………？」

「だったら何で……？」

「そうだね……」

確かに調べてみたら管理局については色々と後ろめたい物があつて  
それで悲しんでいる人がいるのは事実だね。 だけど、それが全  
てじゃないし、僕達も全てを知った訳じやないよ？」

「…………」

悠夜の言葉に黙るリリア

「なら主はどう思って、行動していくのですか？」

フィルスが問い合わせる。

「そうだね……

まず言える事は僕達は管理局の全てを知った訳ではない。それで、管理局をどうするっていうのもおかしいよね？

なら直接、自分で見て感じて自分が正しいと思つやり方を見付けたい。

何も知らないで批判するのも弾圧するのも結局、H'Gに過ぎない……  
それは今、必死に頑張ってる人に対しても失礼だし、だから僕は  
間接的にじやなくて自分で見てみたい

「そうですか……

しかし、それだと主も手を汚す事もあるかもしだせんよ？」

「僕は聖人じゃないよ？手を汚す事を恐れていたら何もできな  
いよ……

それに、後ろで偉そうこじてるのも性にあわないよ」

「判りました。そこまで言つのであれば何も言いません。皆  
も宜しいですね？」

フィルスが皆に尋ねるとシュレリアを除いた2人が頷く。

「シュレリア？　まだ何か納得いきませんか？」

フィルスの問い掛けに応えず俯いて何処か暗い表情を浮かべる  
シュレリア……

「シュレリア？」

悠夜が心配そうにシュレリアに呼び掛けるとシュレリアはゆっくり  
顔を上げて話し出す。

「ねえ……悠夜？」

それって凄く大変じゃないかな？　どうして管理局の人まで考える  
の？」

そう問い合わせられると悠夜は静かに目を閉じ祈るような口調で語り始める。

「Please help us to go away from the crime, and to follow you when loving and serving... In the glory and honor, even for a long time is yours...（罪から遠ざかり……愛と奉仕において、貴方に従うことが出来るように、私たちをお助け下さい。栄光と誉れは世に至るまで貴方のものです…）」

「悠夜……それは……？」

語り終えた悠夜にシユレリアが畳然とした表情を浮かべる。  
因みに、スフィールは最初の一言で「聞こえなあ～～い！…」といつてしまがみ込んでいる。

「実はね……死ぬ前にはアイドルとかなんとか言われていたんだけど、元々は紛争地域を仲間と廻って音楽を聴かせて歩いてたんだ……そこで戦っていた少年兵達が毎日祈つてた言葉だよ……」

悠夜は静かに語る。

「だから少しは戦争の仕組みも理解は出来るんだよ……人の欲望、宗教、資源……色々な問題を抱えてる。

そしてそれは、弱い人間から全てを奪っていく。

例えば僕が管理局を否定して敵対組織を立ち上げるとする……

そしたら、管理局といずれ戦争になる。

結局、それでまた傷付いて新たに僕等を憎む人が現れる。

だから、僕は知りたいんだ」

シユレリアはその言葉を聞くと少しは哀しそうな表情を浮かべて……

「そうですか……

なら何も言いません。私は悠夜についていきます。

本当にそういう所は変わりませんね……」

シュレリアの最後の咳きは静かに響いた。

「え……？ シュレリア……それって……」

と聞き返そうとした悠夜だがそこにスフィールの叫びが搔き消した。

「ゅう～～やあ～～！？さつきの言葉はなに！？」  
悠夜がエジプト人になっちゃったよお～」

「ちょっと待て！？」

何で僕がエジプト人になる！？」

「じゃあ宇宙人！？ 私は日本人だから異世界の言葉は判らな  
いよ！？」

「待て！？ それはそれで可笑しいよ！－ スワイールつてどうから見ても外国人だよ！－！」

「そんなことないよ！－ 忍さんやはやてちゃんも『スワイールは日本人だねえ（やねえ）…… 色んな意味で……』って言つて誉めてくれたんだよ！－？」

「………… それ誉めてない………… 誉めてないよ………… スワイール…………」

「マスター！？ 私が食器を洗つてる間にお話しするなんて酷いですよ～！？」

「…………あつ…………  
忘れた訳じゃないよフェリ？ ただ…………思い出せなかつただけなんだよ？」「

悠久の苦しき言い訳が虚しく響く……

「仕方ない……  
フリは空氣……」

「空氣なり仕方なによ

「ある意味、おこしこねー」

「ふつ……てつきり私が空氣キャラかと思こましたがとんだ伏兵です  
すね」

「むさへー!?. 私は空氣でも背景でも仲間外れのせびしんぼで  
もありません!.. マスターからも言つて下さい!?.

因みに上からリリア、スフィール、シュレリア、フィルスである。

「あはは……  
ノーノメントで……」

「酷い！！  
マスターのばかあ！？」

月神邸にてフヨリの叫びが響き渡るのだった……

「やつこえばシュレリアはあの時なんて言つてたんだが、……」

あの時はフェリが暴走したお陰ですっかりと忘れていた事を思い出しました物思いにふける。

「すいません！ 悠夜さん。 お忙しいところ失礼します！」

突然の通信に悠夜は思考を止めて返事をする。

「いや。 大丈夫だよ。 それよりも 何か事件かな？ クロノ君？」

〔「はい。 ミッド付近で高魔力反応が測定され調査に出でていた局員の反応も消えました」〕

悠久の質問に答えるクロノ

「わかったよ。直ぐに行くフェリとシュレリアは？」

〔はい。もうすでに準備にかかるて貰っています。  
…あのもしかして余計な事しましたか？〕  
…………

「いや……完璧だよ。

流口はクロノ君だね？」

〔いいえー、自分はまだまだ……〕

「相変わらずマジメだね……クロノ君は……  
さてと、じゅあお仕事だ」

〔はー。では一いつも準備してますね〕

自分より年上の部下からの通信は消え、悠夜は自分のデスクからあるものを取り出す。

「さてと……お前たちの初起動だ。ようしくね？」

そう話しかける悠夜の手の中には赤い宝石と黄色い三角形の形をした宝石が悠夜に返事をするかのように静かに光りを放つのだった。

「さあ……行こう。

レイジング・ハートにバルデイッシュ！」

NEXT

ラジオ

悠夜・フェリ

- - -

悠「みんな久し振りだね、僕は元気じゃないよ!」

すずか「あのね……悠くんまさかそんな状態で再開するつて馬鹿な  
のかな?」

悠夜「そうだよー!? なにに無茶してんのーーー!」

悠「あ……今回は前から少しずつ書いてたのを妹に代筆しても  
らって仕上げたからノープロブレム」

フヒリ「よくそんな気が起つましたね～？　ぶつちやけ意識不明  
つてどんだけですかー？」

悠「僕もびつづき（。 。 ）（。 ）」

すずか「とじめが必要かな……？」

悠「めさひこ（—）（—）」

悠夜「あはは……  
じやあ始めよ」つか？

フヒリ「それが良いですよー」

悠夜「先ずは今回の話しだが……ぶつちやけになり展開変わり  
すぎじやない？」

フヨリ「そうですねー  
わたしなんか空氣でしたしー（黒笑）」

悠「いやー 何かあのままだとグダグタと続きたがつたからね」

すずか「それにしたってやり方があるでしょ?  
それに……なのはちゃん……良いの?」

悠「（ ）」

悠夜「忘れたな……」

フヨリ「です……」

すずか「知らないよ……」

悠「あ、あはは……そんな訳ないだろー？　主役だよー？　忘れないよーーー？」

悠夜・フェリ・すずか

「……………（P　「q）」「」

悠「……………因みに空白の期間はそのつむ劇場番みたいな感じで出せたらいいなあ…………」

悠夜「誤魔化した！？」

それと予定じやなくて願望？！

「……………質問に行こうか！　フヨリよろしくー」

フェリ「仕方がないのですねー　では…………教えてー？・フェリ先生ー」

すずか「タイトルあつたんだ……」

悠夜「知らなかつたです……」

フューリ「えー　このコーナーでは読者さんの質問をわたしがきつかりと答えてフューリちゃんサイコー　ってわたしの好感度を上げる為のコーナーだよ！」

悠夜「おもこつきつ私情だよー。」

? 「…………空氣のくせに（ボソッ）」

フューリ「何か言こましたか！？　つてあれ？　誰も聞ませんねー？」

悠夜「えーと最初の質問がカガヤ先生のノア様ですねー」

フヨリ「ひあ～！？」

勝手に読まないで下さい…！」

すずか「そういえば何でノア……様なの？」

フエリ「わたしのおねーちゃんでしょ～です」

すずか「そ、うなんだ……」

フエリ「じゃあ質問いきますよー』悠さんはギヤグキヤラだから何をしても死にませんよね（黒笑）『……これは……』

悠「」

フェリ「はい！死にません」

悠「ちよい待ち！？」

僕がいつギャグキャラになつた！？」

悠夜・フェリ・すずか

「「「最初から…」「」」

悠「な、何だつてー！？」

すずか「第一……女性に刺されて死にかけるつてギャグキャラでし  
よう？」

フェリ「その他にも色々やりましたよねー？」

悠「…………（ 、 ）」

フェリ「はい！ というわけで悠はギャグキャラなので死にません

』

すずか「じゃあ次だね？』

鮮血の刻印先生から『ギャグ要因はフェリ、シュレリア、スフイー  
ルでは？』『これは間違いないね！』

フェリ「そんな事はないですよ！ あの3人ならともかくわたし  
は……（ガシツ）へ？」

スフィール・リリア・シュレリア

「…………」「」

フェリ「…………えへ」

スフィール・リリア・シュレリア

「…………#」「」

「二十九年一月。」  
「ハニカム」

スフィール・リア・シュレリア

「待て〜！？」 = 〜(\*・)(ノ)

「以上、お笑いカルテットでした！」

すずか「悠夜くんつてマイペースだね……」「

悠「そうだね」

では最後に鮮血の刻印先生のエクシーガさんからだね、『悠久の何処が好きなんですか。出来れば全部以外で』これからきちんとした描写はまだ出てないよね~経緯はともかく理由を語つて貰おう!

フリ「キュー」（++）／

すずか「は無理だからスフィールからだね」

スフィール「うーん……

そうだね、悠夜がこの前にアイスを奢ってくれたから

悠・すずか

「やす！？」

スフィール「それからねーその後にたい焼き買つて貰つたし、それ  
からそれから

289

すずか「この後、延々と語り合つたけどカットね？ 次はリリアちゃん

リリア「…………私は悠夜の為に存在して悠夜は私の為に存在  
する」

悠・すずか

「…………」「

すずか「何といつか……リリアちゃんならしいね……」

悠「すずかちゃんも人の事は言えないよ（ボソッ）」

すずか「また意識を飛ばしたいみたいだね……」

悠「最後はシユーレリアです……」

シユーレリア「あの……まつといいんですか？」

悠「いいから早く答えてーっ！」

シユーレリア「は、はあ……私はですね……贖罪かな？」

すずか「シコレニアちゃん……？」

シユレリア「はつ！　い、いえ！　ゲームです！　ドラエでひたすら城の周りで経験値を稼ぐ悠夜に掘れました！！」

すずか「何処を掘るのよ……」

「所でもう終わった？ヘッドホン着けてて何も聞こえないんだけど？」

悠「あ、はいはい！ 終わったよー！」これで終わりだね？」

すずか「フヨリちゃんがまだ（ホラシ）」

フニリ「やや～～～（+）（+）！」

悠「といつ訳で教えて…フヨリ先生へは今回お終りします」

悠夜「質問とかあつたら何でも送って下さる…」

すずか「要望もあつたらじしで送つてね?」

悠「てなわけで現在は病院のベットで妹に代筆をさせてる状でした

!」

悠・悠夜・すずか

「解散!」

すずか「ねえ……悠くん? お話の続きをよ……?」

?白い魔王「奇遇なの…………私もお話しにきたんだ…………」

悠「ふ……悠は逃げ出した！！」

すずか「しかし周りこまれた」

?白い魔王「なの」

## 第9話（前書き）

今日はいよいよ彼女が出ますよー！

無理矢理ですが……

決して脅された訳じゃないぞ（泣）

「クロノ君。状況は？」

「はい。本日未明にミッド付近で高い魔力反応が検束され調査チームを派遣したのですが反応が全てロストされました」

ヘリ内部

悠夜は自分の執務補佐官であるクロノ・ハラオンと任務について話しあっている。

「調査チームの構成は？」

「Aランク魔道師が3人に現場指揮として一尉と執務官一名の

5人構成です

「調査には充分だね。  
他に判つた事は？」

「反応がロストするさいに戦闘があつたみたいなのですが戦闘データや通信履歴も全て消去されてしまいこれ以上は……」

「そつか……

なら確実に戦闘になりそうだね……」

「それと、ただ……」

クロノの口調に困惑が見えはじめる。

「ただ？」

「えっと……一部で検出された魔力反応なんですがAAAランクを越えていたそうです……」

「エースか……」

「ですがいくらAAAとはいえるランク以上が5人の局員がやられるのでしょうか……」

「クロノ君……事態は常に最悪を想定すること。  
それと魔力ランクだけで判断するのは危険だよ?」

「そうでした……

すいません悠夜さん……」

「前から言つてゐるけど敬語はよして欲しいな……

僕は年下だし……」

「そんなのは関係ありません!! 悠夜さんは僕にとって尊敬する先輩ですし憧れです!!」

クロノの口調が熱血なものに変わる……

「相変わらずだね……

クロノ君はさ……」

ふとクロノとの出会いを思い出して苦笑いを浮かべる悠夜。

クロノと出会ったの悠夜が管理局に入局してから間もなくで最初からこんな感じだった。

悠夜の方が僅かに早く入局したのだが悠夜は同僚として見ているのに対してもクロノは史上最年少での執務官として入局した悠夜を尊敬し、少し……いやかなりの悠夜の熱狂的なファンでもあり、悠夜の補佐官に入局したばかりのクロノが必死に勉強して配属されたのも有名である。

「あははは クロノはマスターのファンみたいなものですからねーそれは無理つてやつですよ」

「それにクロノ君は頑固だから……  
諦めた方が良いと思いますよ？悠夜くん」

悠夜が内心でため息をついていると両隣に座つて話しを聞いていたフェリとシュレリアが話しへ入ってくる。

改めてクロノに視線を向けると拳をぐつと握りしめた手をキラキラさせている年上の少年の姿があった。

管理局に入つてまだ一年なのが恐ろしい事にクロノみたいなのが増えていくようで、既にファンクラブなるものも結成されたと報告を受けたのも記憶に新しい……

「…………ふう。

フォーメーションの確認にいくよ?」

悠夜は諦めたのか疲れた表情をしながらフォーメーションの確認に入る。

「まず建物に突入するのは僕とシュレリアで行く。フェリは後方で決戦の展開、その後は全体の管制を統括。クロノ君は他の局

員を指揮、建物を取り囲むように展開、半径3キロ単位で警戒して対応して貰う。それから建物の瓦解、要救助者がいる可能性も考えてレスキューチーム要請をしておいて」

「はい。了解です！

あの……フェリは一緒にやなくて大丈夫ですか？」

管理局で既存する『デバイスでは悠夜さんには……』

クロノが言いつづけながらフェリを見る。

「ああ……新型の『デバイス』が完成したから今からはそれで行く。

それに今回は建物の広さを考えるとフェリとのコラボは最善でないと思う。

ぶつつけになるナビ今回はじの子達に頑張って貰つよ

『Nice to meet you - chrono』（初めましてクロノさん）『

『I am glad to meet you.(お会いで  
きて光栄です)』

レイジングハートとバルディッシュがそれぞれクロノに挨拶をす  
る。

「インテリジョントデバイス……！　しかも2機ですか！？」

クロノが驚きの顔で悠久を見る。

「うん。テストもかねてね？　レイジング・ハートが砲撃、  
防御、バルディッシュが近接と高速機動がメインになるのかな？  
今までほんのストレージとフェリでなんとかしていたけどフェリ  
もスタンダードアローンで動けるからね」

「あの……  
そんないきなりで大丈夫ですか？ 悠夜さんの実力なら問題ないと  
は思うのですが……」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ。この2機は  
僕が知る中では最高の人達が造り上げたものだからね」

悠夜がそう言つとクロノは心配そうだが頷きレイジングハート  
とバルディッシュに

「君たち、悠夜さんを直しく頼む」

クロノの言葉にレイジングハートとバルディッシュは

『All Right』

『Yes Sir』

とそれぞれ返すのだった。

「月神執務官。現場に着きました」

「判つた。…………それじゃあ準備は良いいかな?」

悠夜の問いかけにそれぞれが首を縦に振る。

「よし。じゃあみんな行こうか。クロノ君、外は任せたよ？」

「はい！ 悠夜さんもお気を付けて！」

クロノの激励を背に悠夜とシユレリアはヘリから飛び降りる。

「さあ……行こうか！」

バルディッシュ！

『Get Set』

バルディッシュがバリアジャケットを展開して執務官の制服姿から漆黒のバリアジャケット姿に変わる。

「バルティックシユ建物内部はどうなつてゐる？」

『It is not felt perhaps, it seems to be intercepted.（何も感じられません。恐らく外部とは完全に遮断されているようですが）』

「レイジングハート？」

『I also think similarly.（私も同じです）』

「そり……っ!?」

フェリ、周囲を素敵！ それと結界急いで！  
シュレリア戦闘準備！ 魔力弾が来る！」

（判りました！）

フヨリの言葉と共に周囲に結界が展開される。

「バルディッシュ！」

『Protection』

悠夜がバルディッシュを前に向けると杖の先からシールドが展開され向かって来ていた魔力弾を消失させる。

「悠夜！？」

「大丈夫！ それよりも陣形は乱さないで！」

シユレリアが慌てて近寄りつとするが悠夜が落ち着いた声で押し留める。

「さてと……急に攻撃される覚えはないんだけどな」

悠夜が建物の方に手を向けるとそこには2人の男がこちらに向かってくるところだった。

「君たちは何者かな？」

目的を教えてもらえるといつも助かるんだけど？」

悠夜の問いに男達は無言でテバイスを構えて睨み付けて応えた。

「管理局に答える」となんかない……」

「教えてくれないと話し合にも出来ないんだけどな……」

「そんなの嘘つぱちだ！？ 管理局が話し合いなんかするもんか！！ 僕達の村を焼き払い村の宝を奪い、さつきだつて話しも聞かずに入りて来たくせに……」

もう一人の男……いや少年が悠夜を睨み付けながら叫ぶ。

「それは本当ですか？」

悠夜が男の方に目を向けると男は黙つて頷く。

「村の名前を教えてくれるかな？」

「カルサシス……」

「クロノ君。聞こえた？」

『データベースを照合中……ありました！ カルサシス……村  
民200名程からなる農村で先月にロストロギアを回収しています』

「その時に指揮を取ったのは？」

『えっと……キング執務官です』

(なるほどね……)

悠夜はクロノの答えに納得した。

確か今日の調査チームにもキング執務官が加わっていた。

彼は調査態度に問題があり度々、問題を起こしていたが何故かそのたびに不問扱いになっていた。

(彼が上層部と繋がっていたのは明白だったけど……遅かった  
か……)

悠夜はそのことに少し頭痛がしたが、頭を軽く振つて男達に向  
き直つた。

「貴方達の事情は少し理解できました。それで貴方達は彼等

をどうしましたか?」「

「殺った。いきなり襲われたんで抵抗せてもうつた。当然だろ?  
?」「おも命が掛かっているんだ」

「確かに貴方達の言い分が正しい事は恐らく間違っていないし、  
調べれば判る事でしょう?……」

「まあ……

管理局員は話を聞かないと思つていいたがお前は少し違うようだな  
?」「

「承知の上ですから……それで貴方達はどうするのですか  
?」「

「管理局を潰す。家族を奪われたんだ復讐するの<sup>は</sup>は人として当然だろ?」

「…………踏み止めませんか?」

「無理だ。俺達はもう復讐する事しか生きる道がない」

そう言つと男達はデバイスを悠夜達に向けた。

「これが僕等の罪か……バルディッシュ」

悠夜は哀しそうに咳くとバルティッシュを鎌状に変化させる。

「だけど……」

悠夜の目に静かな力が宿り始める。

「ここでも歩みを止める事は出来ない……  
だから……貴方達を管理局員の暴行の罪で逮捕します」

悠夜はそつまつと男達に向かっていった。

（悠夜SIDE End）

（海鳴市 翠屋）

「あつー　なのは、なのはーー！　悠夜君がテレビに出でるわよー！」

「本當ー？　お姉ちゃんー！」

なのはと呼ばれた茶色い髪をした少女は姉の言葉に慌ててコビ

ハグのトランジの前に寄りついてゐる。

「わ、わわー？」

だがよつぜん慌ててこたのか途中でつまづいてしまひ。

「おひとー。危ないな。氣を付けりよなのは」

そんな彼女を慌てて支えたのが黒髪の高校生位の少年だ。

「えへへ…………」めんなさいお兄ちやんーーー

そんな兄のたしなめには恥ずかしそうに謝る。

「それはいいから。

早くしないとテレビが終わっちゃうぞ？」

兄の言葉になのはは、はっと思つ出すと再び慌てて

「あ～！？ 急がないと終わっちゃうの…。」

と叫びリビングに向かつて行った。

そんな妹の様子を見て苦笑いを浮かべる黒髪の少年……い  
や高町恭也。

海鳴市翠屋の高町士郎、桃子夫妻の長兄であり古武術御神刀流小太  
刀二刀術の師範代である。

「おや？ 恭也は見に行かないのかい？ 恭也も彼の歌は好きだつて言つてなかつたかい？」

「父さん」

恭也に話しかけるのは高町十郎。

喫茶店、翠屋のマスターでもあり御神流の剣士もある。

「うん。 いま行くよ。

俺も彼の歌は好きだからね

「恭也が音楽に興味を持つのも珍しいわね  
忍ちゃんの影響かしら？」

と恭也の後ろから話しかけるのは高町家をまとめる最強と噂される高町桃子。

「か、母さん違うつて！だつて彼は海鳴から出たスターだし、  
彼の歌は何だか心に響くんだ！」

「あらあら素直じゃないわね」士郎さん恭也つたら向でこうなん  
でしょ？

「恭也だつて年頃の男の子だから仕方ないさ。  
だがな恭也？ 男のシンデレラほど見苦しいものはないぞ？」

と史朗と桃子が恭也をからかうと案の定、顔を真っ赤にしてリ  
ビングへと走つて行つた。

「あいら　怒つちやつたわよ？ 士郎さん？」

「男はああやつて成長するものだよ？ わて、私達も海鳴が生んだスターの歌を見に行こうじゃないか？」

「やつね 士郎さん」

楽しそうにコンサートに向かつ高町夫妻であった。

「あー、お父さんもお母さんも遅いよ  
もつ始めひめちゃんのー」

「いめんなのさ。

お母さんが僕を離してくれなくてね」

「あらあらお母さんたら

「いやませ……」

相変わらずお父さんとお母さんは仲がいいの……

「ここがちょっといいたいね……」

「美由希……諦めろ……」

高町夫妻のラブ・ラブな空間に呆れる高町3兄妹……

「あつー？　お父さん達もお兄ちゃん達も静かにして！　始まるのーー！」

「なのはも隨分と熱狂的だよな……」

「そりだね…………恭ちゃん…………」

なのはの剣幕に若干引いた恭也と美由紀だった。

「あー…………やっぱり悠夜くんの歌は最高だったの…………」

無事に番組も終わり満足そうな表情のなのは。

「それにしてもなのはの熱狂ぶりは凄いわね」

「ふむ……なのはが毎日遊びに行つてゐる海鳴公園で歌つていたのがきっかけで『レビュー』したらしいし、特別なんだろ？」

そつ話す士郎と桃子の話を聞いて美由紀はなのはこ尋ねる。

「へえー それだつたらなのはも悠夜君の歌声を生で聴いたりしたの？」

「うう……それが無いの……毎日、遊んでたのに……」

美由紀の発言にザーンと落ち込むのは。

「ま、まあ。海鳴公園で暇つていたんだー。田代もそんなに離れていないだらうし、いつか遇えるわー。」

落ち込んだなのはを見て恭也が慌ててフォローする。

「あら恭也！ それはナイスな提案だわー！ そうしたら内のケーキを食べて欲しいわね～」

「それは素晴らしいねーなら最高のおもてなしをしなければ…」

…」

「…………ダメだ。やひこむ…………」

恭也は両親の戯れを見て味れるが、

「家に来たらサイン貰おー　それに[写真も]……ヤバイー！  
嘘で出で出来るな～」

「や、 ゆゆ悠夜くんが家にーー　はいやー

「…………俺の方が間違つてゐるのか？」

恭也の嘆きが高町家に広がるのだった。

} 海鳴市 愉快な家族 SIDE Ends }

} ヘリ内部 }

「あの……悠夜さん。 お疲れ様でした……」

クロノはヘリに帰つてから無言で考え込む悠夜に話しかける。

「ん?  
…………ああ、お疲れクロノくん」

それに対し悠夜の返事は酷く消耗した様子である。

「…………あ、あの悠夜さん。先程の件、まだ気にしてますか……？」

クロノの言つ先程の件とはつこさつき悠夜が捕まえた犯罪者の事だ。

「さてね……でもこればっかりは慣れたくないね……」

「あの……悠夜さん。  
正義つて何でしちう？」

クロノの問いに悠夜は静かに目を閉じて、黙り込む。

「…………戦争する側の都合の良いものだよ」

しばらく悠夜は目を開じて考え込んでいた悠夜が目を開き語つたことはクロノには理解出来なかつた。

「都合の良いもの…………ですか？」

「そう。正義なんてものは存在しない。あるとしてもそれは自分の考え方の方針に過ぎない」

「存在しない……」

「そもそも管理局法自体が管理局が定めたものだし僕等はそんなに偉いのかな……」

「悠夜さん……」

「まあ、法自体はそんなに間違つてるとは思わないけど、僕達（管理局側）の間違いを罰する記述とかが無いのが疑問だけね」

「…………」

悠夜の独白に黙り込むクロノ。

「結局、管理局員も同じ人間であつて全てが正しい訳じゃない。大切なのは自分で考える事を止めて行動しないこと。僕達の正義だつて必ずしも正しい訳じゃないからね」

「難しいですね……」

「クロノくん。これは僕にも言えるけど執務官はそういう矛盾に直面する機会が多いと思うよ？」

次元犯罪を追つてると悲惨な事件を担当する機会が多いだろうしね

「考えただけで吐き気がしてきますね……」

「悠夜さんは本当に色々と詳しいですね？」

「自分が年上つて忘れちゃいますよ？」

クロノが珍しくからかう口調で悠夜に話しかける。

「まあ……色々あつたからね。僕達は魔法と法の番人と名乗ってる以上、全てに公平であり誰よりも自分に厳しくないぢやね？」

「悠夜さん……！」

「そうですね！ 流石は悠夜さんだ！ やっぱり憧れます……！」

クロノの雰囲気が一転してまたキラキラし始める。

「…………所でクロノくん？」

「ハイ――何でしちゃつか悠夜さん――」

尻尾があつたら間違いなくはち切れんばかりに振つているだろ

う

「僕つてそんなに老けてるかな？」

「え……？」

時が止まる。

「い、いえそんなつもりで僕は……」

「クロノくん？」

「は、はい」

「帰つたら模擬戦しよ。久しぶりにクロノくんの悲鳴……も  
とい成長がみたいからね」

「ゆ、ゆゆ悠夜さん?  
いま何か物騒な単語が……」

「何か言つたかなあー? クロノくん  
」

「いえ、何も

『クロノが悪いですよー? マスターを怒らせるからー』

『まあ、自業自得だからね』

フヨリとシユレリアからの念話にガックリと肩を落とす執務官補  
佐の少年がそこにいたのだった。

おまけ?

{ Next Story }

「最近、悠夜くん家に遊びに来てくれへんなー  
まあ、仕事が忙しいからしゃあないか……」

はやてはやうしくと1年前に出会った少年の事を思い出す。

「せ」はりあれだけのイケメンさんで歌も上手いと人気も凄いやろうな……優しいし……」

はやては悠夜から送られて来たじつに田を移しながらぼやぐ。

「でもかまへん！！

悠夜くんはわたしの大切な人や！ 支えてあげへんと！

‘‘/’’

そうなるとわたしつて悠夜くんの奥さんやん！

はやての表情が余り表現したくない顔になる。……

「ファンの女の子がまーみるや 悠夜くんは既にわたしの物なんやからな」

そう笑顔で話すはやはては……立派な肉食系だった（笑）

「……………？」

「どうしましたかー  
マスター？」

「こ、こや……何か今すぐこはやでこ余こに行かなことヤバイ事になりそうな……」

「どうしてやが出て来るのですか～？」

「分かんない……」

「？」

おまけ？ E n d

第9話（後書き）

～レーベンハーフト～

悠「じも～レーベンハーフト～

すずか「今日は随分と速かつたね……まだ動けないの？」

悠「妹が…………ね…………」

悠夜「何か暗い…………」

悠「あ、気にはすんな（泣）  
早速、始めるよ。」

フヒリ「ネタ帳は真っ白ですよ～？」

悠夜「まあ、これも近々判つてくるかと思わ～」

悠夜「あんたが書いたんだろ？」「急展開でびっくりしたよ～。」「！」

悠夜「あはは（。。。。）  
やつこえば悠夜ってナゾで圧するんだねー」

すずか「なのはちやんこまた怒られるよ～。」

悠夜「あれさじこかの魔王のせいであります僕のせこじやなこ～でーーー。」  
途中で終了したね？」「

悠「そ、それと『バイス』は英語にしてみたけど僕は余り英語が得意じゃないから間違った表現や誤字が出ると思つから優しく教えてくれると助かるんだな」

悠夜「だったら日本語にすれば良いのに……」

すずか「これだから『厨』には……」

悠「…………（＼＼＼＼＼）」

悠夜「さてバカの相手はそこそこにフェリ宣しへー。」

フェリ「分かりました！ 教えて！？ フェリ先生～」このコーナーは本編の疑問やどんな質問もフェリが答えて解決！！ フェリちゃん

最高 の「パートナー」です 」

すずか「何か増えてる……」

悠夜「出番が微妙だから必死に……」

フエリ「そこお……黙るのです！？」では早速、カガヤ様から『今  
の時間列つてどのくらい？』…………これは

悠夜「答えましょうー 悠夜が海鳴に来てから約1年後くらいです！  
！」

悠夜「なあ作者？

それって普通、判るような記述が入らないか？」

悠夜「え、えーとその、そつだ！ あれだよ……あれのせいなんだよ

！？」

悠「その通り——（）」

すずか「つまらぬれてた……と

悠「ああ……（）むかこ酷（）……

悠夜「一度死んだ方が良いよ……てか死ね」

「」

悠「ノストラダムスの陰謀だつたんだよ——（）」

「」

悠夜・フューリ・すずか

「？」

フュリ「ちゃんと確認しないからですよー  
因みに今回のお話しひつこくらり出でるので多分大丈夫です  
ねー」

悠夜「では次お願い

フュリ「はい、えーとノアお姉さまからですねー『代筆を頼まれた  
妹の反応を是非』」

悠「これは…………再現∨を流すよ…………」

（再現∨TR）

悠「なあ……」

妹「なーーー?」

悠「書いてくれ」

妹「何を?」

悠「小説……」

妹「お兄ちゃん……手術で頭がおかしくなった?」

悠「安心しる。元からおかしい」

妹「自分で言うなあー!?」

悠「や、関西の血が……」

妹「私もお兄ちゃんもバリバリの関東人だよー!ー!」

悠「いつも心にハリセン……これ常識だよ?」

妹「知らないよー!ーそんな常識ー!ー!」

悠「お前だってノリが良いじやん……」

妹「誰のせいだ!?」

悠「国?」

妹「おまえじやばけえ!ー!ー?」

悠「という訳で書いてくれるかな?」

妹「いい もう つてしまつた!?」

悠「ふははは!! そのセリフを言った人間は断れないんだかんな!  
!」

妹「くつそー タモさんめえ……！」

悠「てなわけで書け」

妹「後で何か奢つてよ?」

悠「仕方ないな……じゃあお前が欲しがつてたイーローのサインボ  
ールを……」

妹「くれるの！？」

悠「俺が真似て書いてやる」

看護師さん「いい加減に静かにして下さい！-？」

悠  
•  
妹

「「」」のなんなせごとく（—）ごとく」

回憶終了

「こんな感じ」

悠夜・フェリ・すずか

「…………」

悠夜「何か凄い……」

フェリ「色んな意味で……」

すずか「てか芸人さん?」

悠「そんなに褒めるなよ……」

「…………」

すずか「やつこえば今回も…………」

悠「代筆だね……」

悠夜「結局……仲が良いのか？」

悠「憎しみあつてはいないね……」

すずか「ちやんとお礼しなよ。」

悠「やてお時間が来たよつので今回はじめてお開き……」

妹「ふざけんなあああ……。」

悠「ひつ……お前は近づくなー。」

妹「誰がこれを書いてると思つてんのよ……。」

悠「// キー？」

妹「やあー僕は// キーマウスだよ つて違うー。」

悠「じゃあ、あれだー！ダックソン!!」

妹「知らんわ！？いいからサインを寄越せえー。」

悠「ちい！？簡単には捕まらんよー。……つて動けん！？何故だ  
でしょ！？ ばーか！？」

悠「してしまったあああー！？」

妹「良いことを教えてあげるよ……お兄ちゃんはまだ動ける訳ない  
でしょ！？ ばーか！？」

悠夜「…………では今回のラジオはこの辺で終わらせてみたいと思います……」

フエリ「わたしのコーナーが滅茶苦茶です（ノ。＼。）。。」「

すずか「何か質問でもまたは無茶ぶりも出来る限りの答えます 多分……」

悠夜「ではまた……」

フエリ「解散です……」

## 第一〇話（前書き）

クロノのキャラ崩壊が（笑）

クロノファンの方には話つておきます！！

時空管理局本局～訓練室

「こつけ（海）で模擬戦は久し振りだね。クロノ君？」

「そうですね。最近はずっと地上勤めでしたからね<sup>アリシア</sup>」

「……………アリシアで………アリ」

「……………アリ」

「これほんぢ事かな？」

「…………すいません。由り…………コンティニュアルヒーリングが……」

「もうここよ……」

「諦める……」

只今、悠夜とクロノは時空管理局本局の訓練室で約束していた模擬戦を始めるつもりだったのだが……

” 悠夜君頑張って～！！ ”

” おい～～しっかりと録つておけ！ 今日のコースに間に合せ  
るぞ～～！”

と何処からか聞きつけたのか悠夜ファンの管理局員や何故か報道の腕章を付けた撮影スタッフの姿である。

「…………」

「…………」

その数は既に訓練室に入りきらなくなる程だ。

「出来ればこんな状況で模擬戦はしたくないんだけど…………」

「悠夜さんはまだ良いですよ……僕は負けるのが前提ですよ?  
万が一にも悠夜さんに怪我でもさせたら明日から出歩けなくな

ります

「それはいくらなんでも…………って」

悠夜はクロノのあまりにも悲痛な表情を見て何も言えなくなってしまった……

「いけえー クロノなんてひねりつぶせー」

「悠夜くん 十秒ですよ」

「…………あいつは…………まじめ…………」

「もしかして僕って嫌われてます……？」

「それは……」

”クロノ引つ込めーー！”

”クロノ邪魔ーー！”

”むつつりホモヤローーー！”

「ちょっと待て！？ 僕はホモなんかじゃないぞ！－決して違うんだからな！？」

野次にキレ大騒ぎするクロノ……

- 1 -

それに対して冷やかな視線を送る悠夜。

「ち、違いますよ！？」

僕は決して悠夜さんをそんな眼で見てません！！」「

「…………」

「ち、ちち違いますよー!? ぼ、僕はそんなつもりじゃ」「クロノ君」「は、はい!」

「模擬戦……始めよ……」

「つ……?」

クロノは悠夜から漂つ異様な気配に何も言えなくなってしまった。

「レイジングハート……」

『A11 Right , Standby ready set up』

悠夜の体を光りが包み込みバリアジャケットを展開させる。

「わてと……  
覚悟は良いかな……」

「ちよつー？ 待つて下さーい—— うんこー！」

あわててクロノがデバイスを起動させる。

「まさかクロノ君がそんなだつたとは知らなかつたよ……」

「いえ……だから違つんです！　ほつ、僕は純粹に……」

”嘘くせごぞクロノ！！”

”コンティ茶なんか飲んでるからそつなるのよ……”

「ふーふー　それとマスターより背が低いぞ——」

「フヒつけやんそれは関係ないよ？　まあ、本当だけぞ……」

「そこの外野！！　僕をこれ以上陥れるのは辞めり……　それと僕は母さんのお茶は飲んでないからな！？」

周囲の野次にまたしてもキレるクロノ。

「はあ……

クロノ君さいい加減に冷静になりなよ……

執務官補佐でしょ？

いざれば補佐じゃなくなるしちゃうとした事で搔き飛ばれてる  
よつだと仕事にならぬいよっ！」

「はつー？　いえ僕はずつと悠夜のこと……」

「え……？　もしかしてクロノ君…………本当に？」

先程とはまた違う沈黙が流れる……

「はつー？　い、いえ違うのですーー。僕はそんなつまつじゅ……

……」

『はーい！ クロノ君がせらりとカミングアウトした所で模擬戦を始めようか』

そんな空間を打ち破ったのは……

「ハイハイ…… カミングアウトってどういう事だ…！ それに何でこんな大事になってるんだ…？」

そこに映像通信で現れたのはクロノと同じく悠夜の補佐を担当するハイハイ執務官補佐だった。

『何つて悠夜執務官殿への熱い告白だよ』  
それに許可ならリンクディ提督や諸々の人達もオッケーしてくれたし  
ねー』

エイミーの口撃に顔を赤くして怒り狂うクロノ。

『むつり君はほつといて悠夜執務官はどう思いますか～？』

エイミィが悠夜の方に軽く片手を閉じてアイコンタクトを送つて  
くる。

「まあ……僕はそんな事で人を差別とかはしないよ。ただ、クロノくんの気持ちには応えてあげる事はできないけどね……ごめんね……」

悠夜はエイミィの視線の意味を瞬時に読み取り、クロノ弄りに参戦する。

悠夜は芸能生活を転生前からしていたせいか空気を読むスキルと芸人の弄り方をマスターしていたのだつだ（笑）

『（悠夜くんナイス）クロノ君、残念！ フラレちゃったねー？』

「な!? 悠夜さんまで!？」

悠夜の言葉に今度は顔が真っ青になるクロノ。

「さて……もつおふざけもこれくらいにしどうか？ リンギティ提督も黙つて見てないで停めて下さこよ……」

悠久がそう話すと田の前にリンクティが映った映像が現れる。

『あららー ばれてた?』

「……こんな面白い事に貴方が見てない筈がありませんよ。それで  
もう良いですか?」

『ええ! 映像も押さえたしもう良いわよ  
それにしてもクロノが……ふ、ふふふ』

「…………（敢えて何も言わない）」

激昂してエイミィ（映像）に詰め寄るクロノとそれを爆笑……  
微笑みながら見つめているリンクティ（映像）を見て悠久は考える事  
をやめた。

「さあ、じよりとひへじよりやへ落ち着いたクロノと模擬戦を始める。

「落ち着いた？」

「…………ええ。」迷惑をかけました……母さんが……

「地が出でるよ？」

「じゃあ、今度はまじめよ！」

「はい。で行きます。」

そつまつとクロノは悠夜に向かって突っ込んで行った。

「（最初から突っ込むなんてクロノくんらしくないね……なら）  
レイジングハート！」

『Access1 shooter』

悠夜はレイジングハートを構えると魔力スファイアをいくつも展開  
させる。

「よし。シヨーート」

悠夜がクロノに杖を向けると創りだした約半分のスファイアがクロ  
ノに向かっていく。

「くつー？」

それをクロノは何とか避ける。

「『J』は避けるより防ぐべきだったね。アクセル！」

悠久のその言葉と共にクロノが後方に避けたスフィアがクロノに向かってさらに加速しながら向かう。

「くつー！ 誘導弾か！ 50以上のスフィアの精密コントローラなんて！？」

「ほりほりまだまだ行くよー レイジングハート！」

『All Right · Explosion』

悠久の言葉に反応して魔力スフィアが一斉に爆発する。

「さて、クロノくんは……耐えたみたいだね」

悠久の言葉通りに爆発の煙が晴れた所にはクロノが魔力障壁を展開している姿が見える。

「はあ……はあ……はあ！　スフィアを展開して爆発なんて非道いですよ！」  
「もつ少しでアウトでしたよ！」

「耐えたから良いじゃない。それに魔力もクロノくんに併せてセーブしてるしスキルも使ってないよ？」

模擬戦を始めるにあたって幾つか決めごとしていたのだが、今回は各メディアの目があることから余りレアスキルや魔力変換資質の使用は無しななつている他に悠久の魔力もクロノに併せてセーブしている。

「無茶いわないで下さこよ。 悠夜さんはそれくらいの制約は関係ないじゃないですか！」

「じゃあ降参する?」

「いえ……

僕にも意地がありますから……

ステインガースナイプ！」

クロノは魔力スフィアを悠夜に向かつて放つ。

「誘導弾か……

なら打ち落とす！

レイジングハート！ ディバインバスター▼e「バレット！」

悠夜はそれに対して幾つもの砲撃でスフィアを打ち落とす。

ディバインバスターverバレット……悠夜が編みだしたディバインバスターのバリエーションの1つで威力とチャージを短縮して連射が可能な砲撃である。

似た魔法にショートバスターがあるが、それよりも威力とチャージも優秀なのが魔力の消費が通常の砲撃魔法よりも激しいのが難点だ。

「くっ！　さすがは悠夜さんだ……不意をついたのに全部打ち落とされるなんて……でも！　こつちはチャージが終わった！」

S2U！　ブレイズキャノン！！」

クロノの足元にミッド式の魔法陣が現れ杖の先から強烈な砲撃が放たれる。

「レイジングハート……準備は出来た?」

『It is preparation completion.  
It is possible to go at any time.（準備完了です。いつでもいけます。）』

悠久の問いかけに応えるレイジングハート。

「よし。ありがとう……じゃあ終わりにしよう!」

天空より集いし 無限の流星よ。嘆きの寄る辺は天地の狭間 その開闢は終焉と知れ……メテオリック・レイディエイション!…』

悠久の足元に巨大な魔法陣が出現して天空より幾つもの巨大な砲撃が放たれる。

それはクロノの砲撃を簡単に打ち消し次々とクロノに直撃していく。

直撃と同時に強烈な爆音と閃光が響きしばらく経つて消えて後には氣絶しているクロノだけが残された。

「ふむ。威力は中々だね。チャージに時間がかかりすぎるのが難点だけど……砲撃としては最高クラスの威力になるかな？」

「ありがとうレイジングハート。後はゆっくり休んで良いよ?」

『Thank you, Good boy』

「ふー サーティ、後は……」

悠夜はバリアジャケットを解除して一息をつくと……

”キヤアアアアー！ 悠夜くんカッコ良いー”

”流石は天才だぜ！！ 変態を簡単に片付けたぜ”

”よし……いい画が録れたぞ！！ 今日のニュースは悠夜執務官

の魔法特集にクロノ執務官補佐の熱烈大告白も3秒で振られる！－”

「…………さて、クロノくんを医務室に連れて行くか。エ  
イミィーこの場の收拾よろしく

悠夜は観客の騒音を意図的に聞き流しエイミィーに話しかける。

『はいはーい　後はエイミィーさんでおまかせ  
悠夜くんはクロノくんをよろしくねー』

「地が出てるよエイミィーまあ、良いけど……  
じゃあフンリヒとシュレニア、医務室に行くよ？

「クロノは弱っちいですねー　まあ、マスターが強すぎただけ  
なんですねー」

「フヒリ……それはここ過ぎだと悪いわよ~」

本当だから余計に悪いよ……」

「シユレリアも何處に毒を吐きますね~  
変態やんこは一度のこと悪いのですよ~?」

「ああ、悠夜くんに色皿を使つてるのは確かに変態だよね……」

「ですか~」

「おーこ! 2人ともやつれとばへよ~

「わわ! 待つて欲しいのですよ~」

「『めんなれご。悠夜くんこま行きます、ー。』

そう言ってクロノを担いで医務室に向かう悠夜を追う2人なの  
だった。

今回の模擬戦の結果。

悠夜>新型デバイスのテストと魔法のチェックく

クロノ>変態の烙印（笑）く

クロノ……………ドンマイイー！

「う、うう……」

ひ、光りが光りが僕を…………はつ！――」

「クロノくん起きた？」

「うなされたけど身体は大丈夫？」

「は……え？ 悠夜さん？ あ、だ……大丈夫です！」

悠夜の問いかけに慌てて答えるクロノ。

「ん？ 反応が鈍いね。 気絶してたから頭の回転が遅くなっ

てるのかな……

ちょっと失礼するよ?」

そう言つと悠夜はクロノの容態をチェックしようと顔を近付ける。

「わ、わわわ！？ ゆ、ゆう、悠夜さん！？」

自分は大丈夫ですからそんなに顔を近付けないで下さい／＼／＼／＼

「？ あれ？ バイタルが上がった？ 急激に体温も上がつて  
るみたいだし……ん、これは検査のやり直しが必要かなー」

田まぐるしく容態の変化を知らせる医療器具を見て考えだす悠夜。  
元々、医療免許を取得していた事や学者気質な所があるからかクロ  
ノの心理に気付かない。

鈍くはないが時々、天然を發揮する悠夜だった。

「さてと、クロノくんも落ち着いたみたいだけど…… 本当に大丈夫？」

「はい。もう大丈夫…………って君たち何をしている？ それだと悠夜さんと話しが出来ないじゃないか！」

クロノの目の前には悠夜を護るようにフェリとシユレリアが立ちはだかっていた。

「マスターを変態から護るのです！」

「恋愛は個人の自由だけど、悠夜くんにフラグは建てさせませんよ？」

「なつーーー？」

フニッヒシュレニアの弾圧に顔を真っ赤にさせたクロノ。

「ほらほら見てくださいマスター、マスターを見てあんなに顔を真っ赤にさせてるです！？」

「うーん ギャルゲのヒロインならともかく野郎の頬染めは気持ち悪い……」

悠夜くん？ あれクビにしない？

「違つー！ 僕はそんな意味で顔を赤くした訳じゃない！！

怒つてるんだ！！ だいたい僕がホモとは何だ！？

僕にはそんな嗜好はないし悠夜さんに對して持つてる想いは尊敬と憧れだ！！

それに気持ち悪いとは何だ？！ 僕の悠夜さんに対する想いを気持ち悪い。

だと！？ 許さんでおまえらーー！」

クロノが熱くいかに悠夜が素晴らしいかを語りだす。

だが正直……

気持ち悪い……

結局、クロノが語り終えるまで数時間掛かった。

話しの内容は悠夜との出会いから始まり何故か『未来の僕と悠夜さん』に移行して話し終わったと思ったらまた褒め称えるというループに入り込んだ。

「…………」

「…………」

「…………」

話しを延々と聞かされた3人は心底疲れた表情を浮かべてうな

だれていた……

「…………ねえ？ フェリ、 シュレリア？」

「はい～…………」

「…………何ですか？ 悠夜くん…………」

「クロノくんをからかうのも程々にして……  
頼むから…………」

「…………はい…………」

悠夜の懇願に2人は力なく頷くしかなかつた……

「そういえば悠夜さん！最後の砲撃魔法つていつチャージしたんですか？」

あの威力を一瞬で溜めるのは悠夜さんでも無理じゃ……」

「あれ？ 落ち着いたのかクロノが悠夜が最後に使った魔法について聞いてくる。

「あれ？ あれなら最初からだけど？」

「え！？ 悠夜さんがチャージしてる様子は見られませんでしが……？」

「ん？ それなら直接見た方が早いかな？」

フヨリよじくへー

「はーいー お任せですー」

フヨリは悠夜の言葉に頷くと映像をだす。

「なるほど……

最初のスフィアを媒体に発動させたのか……」

その映像に映っていたのは悠夜が最初に魔力スフィアを生み出してクロノに向かって発射してのシーンだ……

その時にクロノは気付かなかつたが悠夜がクロノに向かって放つたのは生み出した半分で残りのスフィアはクロノに直撃した瞬間に天高くに放っている。

余りにも自然かつスピードイーに動いていたので気付いた観客も少なかつたようだ。

「判つた？

でもあれってあんまり使い勝手が良くないんだよね……チャージに時間が掛かり過ぎるし、気付かれたら終わりだからね？」

「でもあの威力は凄いですよ……一発だけでも砲撃としてはお釣りが来ます……」

「まあ……試作だしね。改良の余地有りますとかな?」

クロノが件の直撃を受けてるシーン見ながら責めながら話すのに対して苦笑いを浮かべて答える。

「それから怪我の治療はして置いたけど、念のためにもう少しはらく休んでると良じよ

そいつはつと悠夜は医務室にあるテスクに向かつ。

「もしかして悠夜さんが看てくれたんですか?」

「ん？ そうだよ？ 何故か医務官みたいな事もやられてる  
し……」

よく見ると悠夜は執務官の制服の上に白衣を羽織っている。

「クロノには勿体ないんですけどねー  
いちいちマスターの手を煩わさないことですよ~？」

「悠夜くんの治療の口が入ると怪我人が増えるんですよね……」

悠夜は基本的に苦手な魔法は無いが治療系の魔法には特に強みを持つていて以前に局員一同に土下座で頼まれ時々、悠夜が医務室に勤める事になった。

因みに悠夜が医務室にいる時は怪我人や病人が増えてしまう事が最近の悩みで、似たような事が研究スタッフの間でも始まりそうらしい……

「さてと、僕はこれからちょっと人と会つ予定があるから少し出るよ?」

フェリは僕とシュレリアは報告書の作成、クロノくんはしばらく休んでて?

後でエイミィが来るから

悠夜はそう言つと白衣を脱ぐとロッカーにしまいフェリとシュレリアを伴い医務室から出ていった。

「流石は悠夜さんだ!…やっぱり素晴らしい……」

後に残されたクロノがやけにキラキラした目をしていたのは秘密だ……

N  
e  
x  
t  
  
S  
T  
O  
R  
Y

## 第10話（後書き）

～～～～～

妹「ああ！　早速始めるわよ！」

悠夜・フェリ

「おー！」

悠「て待てやーひー？」

妹「何よ？　そんなに騒ぐとまた怒られるよ～。」

悠「そればじうでも良いわー！　なんでもまた出てるんだー？　しかも最初からー！」

妹「だつて私の評判なかなかだし～　手伝ってくれし良いじやん！」

悠「本編よりも人気ないかお前……」

妹「私の人気でこの作品は持つのよ！」

悠「うつせこやー……（、；；；）」

フェリ「ではオープニングもそー」「今回の話を振り返りまし  
ょう～  
今回は何といつても……」

悠夜「クロノくん……」

フェリ「まさかクロノが……だったとは～

悠「因みにボーアズラブな展開は絶対に無い！！  
だいたいクロノのキャラ崩壊はお前のネタだからなー！？」

妹「だつて弄ると面白いし！ それにお兄ちゃんもノリノリだった  
じゃん！」

悠「…………さて質問いくか？？」

妹「誤魔化した……」

悠夜「あがが大人が都合の悪くなつた時の態度だよ？」

フェリ「汚いです～」

悠「うつむこ……うつむことお手紙読むーー！」

すずか「アリサちゃんみたい……」

悠「誰がツンデレや！？ つてすずかさん居たんだ……」

すずか「最初から居たけど妹さんに邪魔されて出れなかつたんだよ  
……」

妹「ナンノコトカナ？」

すずか「お仕置きかな……」

妹「ひ、ひい～？！」

し、質問！…早く質問に行つて…？」

フェリ「仕方ありませんね～ では『教えてフェリ先生』 このコーナーはこの番組に寄せられた質問や無茶ぶりを私が答えてフェリちゃん最高 ってなるコーナーです」

悠夜「相変わらずだね……」

フェリ「何の事ですか？」では早速行きましょう  
最初は鮮血の刻印様からですね～えっと『ヴィレイサー率いる力  
タストロフィーVSなのは達管理局との対決の発端となるネタを提  
供して下さい～』…………え？

悠「フェリ頑張れ～超頑張れ～」

妹「フェリちゃんファイト～」

悠夜「大変そうだねフェリ？」

すずか「逃げたね……フェリちゃん頑張つてね？」

フエリ「ええーー!? 私が答えるですか?ーー!」 無理ですよーー!?

悠「だつてフエリのパートナーだし」

悠夜・妹・すずか

「へへへへへーー!」「

フエリ「そんなん……手伝って下さること～

悠夜「フエリ好感度ヒヤだよ?」

フエリ「頑張りますー!」

ーん、お弁当に入ってる卵焼きの味付けが好みじゃなくてヴィレイ  
サー君とファイトさんが喧嘩なんてどうですー?」「

全員

「へへへへへーー!何ぞのパメティイーー?」「

フヨリ「だ、駄目ですかー?ならば…………管理局の上層部の暴走ははどうですー!」

悠「よくあるネタだね」

妹「まあ、一番無難だけど…………」

フヨリ「むーならば、民衆が管理局に激怒してそれを武力で抑える管理局とそれから護るヴィレイサー君達はどうですー!」

悠夜「それって暴走と一緒にだね?」

すずか「まあ、悪くは無いこと悪いけど…………」

フヨリ「ならばならばー!ヴィレイサー君が突然、私は天に立つと

か壇つとか……これなつこしみの姿で踊りだすとか……」

悠夜「フヒリー！？ 頭から煙がーー。」

フヒリ「わわわー」

悠「フヒリには無理だつたか……なうばは僕が少し考え方つ……」

妹「珍しいー」

悠「たまにね……

まずは前提条件としてスタンスの確定だね。勸善懲悪を決めるとや  
りやすいよね。この場合は管理局を悪、ヴィレ君達を正義とするの  
が一番簡単なんだけど。

その場合は管理局をひととん落としてフヒリが言つたような  
のが判りやすいね

妹「他はー？」

悠「後は勸善懲惡を決めないでどちらかが正しいかを良く判らなく  
させる方法があるけど……」

すずか「けど……？」

悠「どっちもバランスよくなきゃいけないから描[画]が難しい……」

悠夜「確かに……」

じゃあ……結局、ネタは？』

悠「難しいねー

このスタンスによつてストーリーが変わるから。

徹底的に管理局と戦つて肅正するなら管理局の残酷さを際立てて、ヴィレ君達に頑張つて貰うか……

はたまた、どちらも正しくあり間違つてるスタンスにするか……  
うーん、しかしこうなるとなるのは達とは完全に敵になるからなー  
よし！上層部に人質を取られて仕方なくにしよう！』

妹「うわ！ 逃げた！？」

悠「王道といつてくれ！！」

悠夜「何だか中途半端になつたけど作者とフヨリコレで限界みた  
いなのですいません！－！」

妹「だいたいお兄ちゃんは中途半端にあれなんだよー！」

悠「何だとー？だったらお前が案だせやああー！」

妹「ふざけるなー？」 作者はお前じやまほけえー！」

悠夜「…………」

すずか「次の質問いこつか？」

悠夜「何だか慣れますね？」

すずか「そんなことはないよ？ 次は力ガヤ様から『悠さんはボケ  
で妹さんはツッコミでオーケー？』 そうだね！ 間違つてないね

悠・妹

「「ちよい待てやーーいつ決まったそんなのー?」」

すずか「最初から……だね」

悠「実は俺がツッコミなんだよーー!」

妹「嘘つくなボケーー!」

すずか「お笑い兄妹……」

悠・妹

「「何か言った!?」「

すずか「次はノアちゃんだね?』2人はシスコン、プラコンです  
そうだね 間違いないよー!』

悠・妹

「『やけんなーーー』」

すずか「まい仲良し

悠・妹

「「ぐつーーー?」」

悠「お前真似すんなーーー」

妹「お兄ちゃん!私の真似しないでーーー」

悠「やがつけてのかーー?」

妹「やつてあるわーーー」

看護師さん

「また貴方達ですか！？」　いい加減にしてトセーーー！」

悠・妹

「「「めんなさい（——）」」」

すずか「じゃあ今回はこれでお別れだね？」

悠夜「質問や無茶ぶりはフリが応えるからよろしくね！」

すずか「では……」

悠夜・すずか

「「解散ですーーー！」」

看護師さん「だいたい貴方達はですね……」

悠  
・  
妹

辞  
め  
て  
え  
ー  
ー

私達のライフルはまだ使  
ってないんだから、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8650o/>

魔法少女リリカルなのは～Angel's singer

2011年6月12日11時48分発行